
DEAD

鼻セレブ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DEAD

【Nコード】

N5972C

【作者名】

鼻セレブ

【あらすじ】

主人公岡村一樹が非日常的惨劇を舞台にどう生き抜いていくかを描いたストーリーです。

1 序章（前書き）

初めての執筆なので至らない点ばかりで掲載も遅くなるかもしれませんが、
せんが何卒了承ください。

1・序章

とある裏路地で・・・

真面目そうな青年と容姿からして不良とゆう言葉が合う二人組みが何やら会話をしていた。

不良1

「てめえなにガンつけてんだよ！喧嘩売ってんのか！？」

*

「見てないですよお、もし気分を悪くしたのなら謝りますよ。」

不良2

「んなもんだっていいんだよ！早く財布出せって言うてんだよ

！」

*

「それは困るんでどうか許してもらえないですかねえ。」

不良2の右フックが*の頬にヒットする

不良2

「謝ろうがなかるうがてめえはボコボコにさりえ・・・」

不良2が話してる途中にヤンキー2の腹を殴りつけ間髪入れず横顔に蹴りをぶち込んだ！！不良2は倒れこんだまま起き上がってこなかった。

*

「そおゆう事なら先に言つてよお、おー痛え。」

そお言いながら頬をさすりながら不良1を見る。不良1がどこから出したのか手にナイフをもって叫んだ。

不良1

「てめえなめてんじゃねえぞ！！ぶつ殺してやらあ！」

*

「さて！話せば分かる、話そおじゃないか。」

不良1

「るせえ！」

不良1が飛び掛ってきたがそれを*はナイフの腕をとりそのまま腕を肘で殴りつけた！ベキツ！とゆう鈍い音が響く。

不良1

「うぐがあゝ」

不良1は腕を押さえて転げまわってる。

*

「だから話し合おうって言ったのに。まあいいやもう用がないなら帰るよお。あつあと喧嘩売るなら相手を良く見ないとね。」

そこを何事もなかったかのように帰路に着く男の名前は岡村 一樹 おかむらかずき

年齢23昔は喧嘩ばかりした結構な不良とゆうか悪いとゆう言葉が当てはまることは人一倍やったと言えればわかりやすいだろう。

自宅に着きドアの鍵をあけようとした。

一樹

「んっ！？開いてる？」

用心しながら家に入り1LDKの部屋の中に入ろうとドアに手をかけ開けた瞬間！

*1

「HAPPY BIRTH DAY一樹〜！」

待つてましたと言わんばかりにケーキを強引に顔面に押し付けられた。

*2、*3

「HAPPY BIRTH DAY〜！」

それをタイミング良くクラッカーの音が響いた。

一樹

「……」

ケーキを手で拭い三人を見つめると。

一樹

「いくつか聞きたいことがあるんだが、これを提案したのは誰だ？
直美だろ！？あとどおやって部屋に入った！」

クラッカーを鳴らした一人で一樹と通っていた高校は違うが片思い
をしている田木 たきなおみ 直美年齢23現役看護師だ。

直美

「はい私が計画したんだよ、もおバツチリ決まっちゃって言う事
なしじゃない？一樹だっておいしいって思ってるくせにい。あっ一
人だけおじさんがいる。（笑）」

満面の笑みで答えた。

*2

「鍵は兄貴さんから借りたんだ、理由言ったら俺も参加したいが用
事があるとかいってマジ残念そうにしてたぞ。」

こいつ高校時代の後輩でやんちゃ仲間、後輩だがタメで連るんでる、
名前は岩田 いわたしん 信年齢22

一樹

「兄貴は来なくていい！」

*1

「まあまあ来なかったからまあいいじゃないの、でも俺兄貴さん好
きだぜ。」

ケーキを投げつけてくれたこいつは板垣 いたがきたかし 隆年齢23こいつとは中
学からずっと何やるにも一緒に腐れ縁。

直美

「じゃあ話がついたとこでパーティ始めようよ。ちゃんとしたケ
ーキもあるしね。」

隆

「そおだな一樹突っ立ってないで顔洗って早く来いよ。」

信

「どしたの？ボーツとして？もしかして嬉し過ぎて感極まっちゃった系？」

足元の顔にぶつけられたケーキの残骸を見て

一樹

「これ誰が掃除すんだよ！」

直美、隆、信

「一樹！（笑）」

一樹

「．．．最後に一つだけ言わせてもらうが．．．俺の誕生日は明日だ！！！」

直美

「あつ。」

隆、信

「えっ！？」

そお言い放った後一樹は洗面所に向かった。

直美

「私掃除しよ〜っと」

責任を逃れるかのように掃除を始める直美

隆、信

「．．．」

隆と信は沈黙の後洗面所から出てきた一樹にあれやこれやと弁解するが一樹は聞く耳をもたなかった。隆と信は落ち込んだが

一樹

「バ〜カ嘘だよ怒ってないよ、誕生日前だろうがしてくれて嬉しくない訳ないだろ。」

一樹はしてやったりで高らかに声を上げて笑った。

隆

「てえめ〜！だましやがって、今日は朝まで飲むからなあ！寝れると思うなよ！」

信

「そおだ！日付け変われば誕生日だからちようどいいいな。」

三人は取っ組み合いながら腹のそこから笑った。掃除を終えた直美が、部屋にやってきた。

直美

「あれ？一樹口から血が出てない？」

一樹

「ああここ帰ってくる前にカツアゲにあってさあゝ、そんな時にちよつとね。」

信

「えっ！？まさかやられたの？」

一樹

「ないない、先に一発食らってやって一蹴してやった。（笑）」

隆

「こいつがそこらへんの奴ら、6人でもやらねえよ。」

直美

「そおゆう問題じゃないでしょ！もお学生じゃないんだからそおゆうのやめてね、一樹に何かあつてからじゃ遅いんだからね！」
そう言いながら口端に絆創膏を貼った。

一樹

「はい、以後気をつけます。」

直美

「分かったならよろしい。今度なんかゴチね。」

一樹

「何でだよ！」

信

「夏でもねえのにあつちゝなあ！（笑）」

隆

「まあそお言つなよ、あつ信クーラーつけて。（笑）」

一樹

「お前らもお許さねえ！飲め！」

隆と信にビールを口に無理やり流しこんだ。

直美

「アハハハ、やれやれ。」

一樹

「お前にはこれだ！」

ケーキを軽く一掴み取ると直美の口に押し込んだ。

直美

「ちよつやめ、ん~~~~~~~~~！」

四人は時間を忘れ今とゆう楽しい日を満喫し明日からもまたこつゆ
う日が来る事を疑わなかった。

だが忘れたくても忘れられない出来事が待ち受けていた。

1・序章（後書き）

何か小説について気になる点やこつなったら面白い等思つことがありましたらメッセージを頂けたら幸いです。

2・始まり（前書き）

どんどん掲載していくので寄ってってください。

2・始まり

喉の渴きで目が覚め目の前にあったミネラルウォーターを飲み干しタバコに火をつける。

一樹

「そっか昨日あのまま寝ちまったか。」

テーブルには昨日飲み明かしたままのビールの缶等が散らかったままで、その横では隆が寝ていた。

一樹

「隆、起きろよ。休みだからっていつまでも寝てんな。もお夕方前だぞ。」

隆

「んゝも．．少し．．寝かせ．．」

まだ昨日の酒が抜けてなく夢心地の隆に一樹は尻に軽く蹴りを入れる。

一樹

「起きないと段々強くなってくるぞお。」

隆

「わかったよお起きるって。」

強引に起こされた隆は電源の入っていないTVをボーっと見ている。

一樹

「直美と信は？」

頭が回らないのか少し考えてから口を開いた。

隆

「あああいつ等？お前が寝て少しして直美が帰るってんで信が送ってったよ。あいつ等今日仕事だしな。」

一樹

「そっか．．」

一樹は隆にタバコを差し出し火をつける。

隆

「一樹くコーヒー飲みたいなあ。」

一樹

「自分で入れろ！」

隆

「ほら人の家だから勝手にやるの悪いじゃん。」

一樹

「じゃあ人の家に勝手に入るのはいいかい！」

そお言いながらもキッチンに立ちコーヒーを入れようとする一樹。

隆

「あつ俺砂糖抜きミルク多めで。」

一樹

「わがまま言うな！だったら自分でやれ！．．．あつコーヒー切れた。」

隆

「え〜マジ〜！」

一樹

「いいよ丁度タバコも買ったしそのコンビニまで行ってくるよ。」

隆

「よろしく、ついでに肉まんも買ってきてねえ、俺は再び夢の中にい〜。」

隆は話しながら横になり携帯をいじっていた。

一樹

「わかったよ、ってか少し片しとけよ」

隆

「へえ〜い。」

聞いているのかわからないような返事をした隆を見て軽いため息をつく。

部屋を出て100mぐらい行った所にコンビニはあってほぼ毎日通

る道だったがいとも何か少し感じがおかしかった。

一樹

「休みだったのになんか騒がしいな、どっかで祭りでもやってんのか？」

さほど距離も長くなかったのですぐにコンビニに着きかごを手に取り雑誌やインスタントコーヒーを入れレジに向かった。

一樹

「すいませえ〜ん。」

レジに店員がいなかったので大きくもなく小さくもない声で店員を呼んだが少し待ってもこないのですっきりよりも大きな声で呼んだ。

一樹

「すいませえ〜ん！」

そうすると奥の従業員以外立ち入り禁止の扉が勢いよく開き何かが一樹めがけて飛び出してきた。

一樹

「!？」

一樹はそれにカウンターで殴りつけるといつもの見慣れた高校生のバイト店員が倒れていた。

一樹

「あつ悪い咄嗟だったし急に掴みかかってくるのも悪いんだぜ。」

一樹がそお言うのと店員はすぐに飛び起き一樹の肩を掴んだ。

店員

「大変なんです！外が！倉庫が！人が！ワ〜って！」

店員は殴られた事なんか意に介しないまま一樹になにかを言っているが焦っているのか一樹は意味が良く分からないが落ち着かせた。

一樹

「分かったから落ち着け！まず俺はかごの中とタバコと肉まんを買いに来て店員がいなかったからお前を呼んだんだ。そこまではわかるな？」

店員は落ち着きを取り戻したのかさっきよりは表情も落ち着いてい

た。

店員

「はい、わかります。」

一樹

「よし、じゃあ何があつたんだ？外とか倉庫ってなんだ？落ち着いて話せよ。」

店員

「外にはなんか異常者みたいのがどこもかしこもいて襲ってくるんです。それで店長が朝出勤して来る時にその異常者に腕を噛まれたみたいだったんですが傷が深くなかったんでそのままにしておいたんです。そしたら昼頃になんかおかしくなつて僕に襲い掛かってきたんです！咄嗟に倉庫に逃げて鍵を閉めて閉じ込めたあと怖くなつてトイレに隠れてました。」

一樹

「まさか言いたくないんだが・・・ゾンビじゃないよな？」

店員

「多分そうかも・・・」

一樹は深く深呼吸をして外を隠れながら見て話した。

一樹

「ふうー。それでそいつらは走ったりするの？あと、この辺にはゾンビいないみたいだけど嘘じゃないよな？」

店員

「こんな嘘つかないですよ！」

一樹

「だな、嘘のが嬉しいか。じゃあまず倉庫のやつをやっつけてみるしかないか！」

店員

「嫌ですよ、閉じ込めたんだしもう害はないじゃないですかー！」

一樹

「相手を色々知ってた方が生き残る確立は上がるんじゃないか？実

際だと映画とかとは勝手が違って頭を攻撃しても無駄かも知れないしな。」

店員

「僕はやりませんからね、とゆうか多分無理です。」

一樹

「期待してないよ、鍵開けてくれるだけで十分。あとなんか武器ある？」

店員がレジの裏からゴルフのアイアンを取り出し一樹に渡した。

店員

「店長のこのぐらいしか。」

一樹

「まあないよりはマシか」

二人は辺りを見回しながら店の奥にある倉庫の前に着いた。倉庫はモーター音だけが響いていて中に人がいるようには思えなかった。

一樹

「マジ中にいんのか？まあいいや鍵開けて。」

店員は黙って鍵を開けると一樹がアイアンを握り締めながら静かに扉に近寄り一気に扉を開けた。なんと扉の目の前にそれは立っていて扉が開いた途端に一樹に掴みかかってきた。

一樹

「マジか！・・・ウラァ！！」

一樹は掴みかかる手をアイアンで受け腹に強烈な蹴りを放ち、それは後ろに激しい音を立てて吹っ飛んだ！

一樹

「ビビッたあ！話しはマジみたいだな！」

それはゆっくりと起き上がり呻き声をあげて一樹に近寄ってきたが一樹の持っているアイアンが頭部に炸裂したがアイアンはくの字に曲がってしまった。

一樹

「やっぱ曲がるよなあ。」

それはアイアンの一撃が効いてなく止まらずに襲い掛かってきたが横面に蹴りが入り倒れこむとその頭部を何度も踏みつけた．．．次第に痙攣と共に動かなくなった。

一樹

「なんとかやれるらしいな、走らないからなんとかなったけどほかの奴はどおかな。」

店員がそれを輝いた目で一樹を見ていた。

店員

「すごい．．．」

一樹

「あつ近寄るなよ、大抵殺したと思って近づくと噛まれたりするかな！はあ．．．こうゆう事なら外はゾンビ共で溢れてるのは間違いないな、まず隆の所に戻るか。」

店員

「あの．．．僕も連れてってもらえないでしょうか？」

一樹は少し考えて言った。

一樹

「携帯使えるか？こうゆう時は大体使えなくなってるんだが．．．」

店員はポケットを探り携帯を出す。

店員

「大丈夫です圏外じゃないです。」

一樹

「だけど隆を電話で訳を話しても信用しないで無用心にここに来たら危険だ！だから俺が迎えに行く。あんたは正面のシャッターを下ろして裏口に待機しててくれ。」

店員

「もお一人にしないでください、それなら僕も行きます。」

一樹

「バゝカ危険になるのは一人でいいし俺携帯持ってきてないから誰の番号もわかんねんだよ。まあシャッター下ろしとけば安全だろ。」

あと誰でもいいから連絡しとけよ家族とかな、心配だろ?」

店員

「分かりました、気をつけてくださいね。」

一樹

「OK行つて来る。」

そう言つて警戒しながら自宅に戻つていった。

2・始まり（後書き）

何か小説について気になる点やこつなったら面白い等思つことがありましたらメッセージを頂けたら幸いです。

3・作戦

コンビニを後にした一樹は来た道に戻るだけの約100mの道のりがとてつもなく長く感じた。

一樹「警戒しながらだと随分時間がかっちまうな、ゾンビ共に会わなけりやいいが。」

その時壁か何かを激しく叩く音が聞こえ、その場所を見ると民家の二階の窓を部屋からゾンビが叩いているのが見えた。

一樹「驚かすなよ、ってかさつきは気づかなかったけど騒がしかったのはああゆうやつか？」

恨めしそうにこちらを見ているゾンビを無視して行くと一樹のアパートが見えた。だが一体のゾンビがアパートの前をうろついている。

一樹「やべ！玄関のすぐ前に居るよ！どおすっかなあ・・・」

と、その時ドアが開きかけゾンビがそれに気づく！一瞬早く気づいた一樹は猛スピードで走り出しそのままの勢いでゾンビに飛び蹴りを放ちゾンビは衝撃で倒れた。一樹はサッカーの要領で頭を蹴飛ばし絶命させた。

隆「お前何やって・・・」

一樹「早く入れ！話しは後だ！」

隆を無理やり家の中に押し込むと、回りに何も居ないことを確認するとドアを閉めた。

隆「お前いきなり何やってんだよ！あの人死んじまったらどおすんだよ！」

一樹「とりあえず簡潔に言う！黙って聞いて絶対に信じる！」

窓の鍵を閉めカーテンを閉めながら言った。そして隆の返事も聞かずに話し始めた。

一樹「今、外にはどのくらい分からないがかなりの数のゾンビがいるはずだ、これからこの先のコンビニに逃げる！動きやすいぐらゐに荷物をまとめてすぐにここを出るぞ！ここは一階だしドアも窓

も薄い、襲われたらアウトだ。分かったか？」

何を言ってるのか良く分かってはいないが一樹が必死になって話してるぐらいだから余程の事なんだろうと思いい、荷物をまとめながら聞いた。

隆「まだ良く分からんが大変な事が起こってるって事なんだな、じやあさっきのは．．．なんだっけゾンビだっけ？」

一樹「そおだ、さっきのがゾンビだ！今のところ走ったりする奴は見えないが油断するなよ、あと倒すなら頭をやれ！首の骨は折っても効くかはまだわからない。あと噛まれたらそいつもゾンビになるから殴るなら手に何か巻いとけ。」

一樹はタオルを千切り両拳に巻いていく。それを見た隆も巻き始めた。

隆「一体何が起こってるんだ？どうしてこんな事に？」

一樹は首を横に振った。

一樹「分からない、俺だっけ聞きたいが誰に聞けばいい？こんな時はまず安全な場所に行く事だ。幸い携帯は繋がるみたいだから直美や信にも連絡したいな。」

隆「そのことなんだけど、お前が遅いからお前に何度もかけても繋がらなくて変だなって思ってたからお前の携帯がそこに置いてあつて、じゃあコンビニまで行こうって思ったんだよ。回線がパンク状態でどこも繋がらないのかな。」

一樹は置いてあつた自分の携帯を手に取り直美に電話してみても信にしてもつながらなかった。

一樹「．．．直美．．．」

隆「でもメールは送れたぜ。」

一樹は携帯を手に取って見ると、受信メールがあつた。

『一樹誕生日おめでとう。もお24才だね。初めて知り合ってから八年かぁ早いねえ。今度の私の誕生日楽しみにしてるぞぉ。白衣の天使より。』

一樹はすぐに直美と信や家族にメール一斉送信した。

『このメールに気づいたら仕事をしていようがすぐにメールくれ！』
．．．送信完了。

一樹「隆も家族にメールしとけ、念のため携帯マナーモードにしとけよ。」

隆「分かった、ところで武器つかそおゆつのなしで行くの？映画だと外国だから拳銃とかあるけどさあ。」

押入れから木刀、金属バット、スタンガン、等凶器が入った箱を出した。

一樹「銃まではないが囲まれたりしない限りこのぐらいで十分だろ。」

隆「まだ木刀、金属バット、スタンガンは分かるけどボウガンがないのであるんだよ。」

一樹「ああ昔兄貴に貰った。でも矢がそんなにないから持っていくだけ無駄だな．．．さてこんなもんかな。そっちは？」

隆「俺はOKだ。」

金属バットを肩に叩きながら答えた。

一樹「じゃあ準備いいなら行くぞ！十分気をつけていけよ。」

ドアの覗き穴から安全を確認するとゆっくりと外に出てコンビニに向かった。

隆「うえっ．．．てかこいつ普通の人じゃねえの？」

先ほど玄関前にいた人であつたらう物を見て隆は言った。

一樹「信用しないなら生きる可能性下がるぞ。」

隆「分かってるけど死んでるの見てると普通の人だぜ、ゾンビって腐ってたりしてないのか？」

一樹「ゾンビになりたては細胞が死んで間もないから普通となんら変わらないさ、動いてるのを見れば嫌でも信用するだろ。」

隆「出来るなら見たくも会いたくもないんだがな。」

二人は半分を過ぎたところで遠目にコンビニのシャッターを叩く奴らが見えた。

一樹「やばいなシャッター閉めるときに気づかれたか？ゾンビは三
体が、なんとかなるか。隆、入るのは裏口からだが正面にいる奴ら
倒していくぞ！じゃないと音で他のゾンビまで寄ってきちゃう！」
隆「マジ！？かなり緊張してきた、勝てるかなあ？」

一樹「高三の時に二人で駅の所の駐車場で20人ぐらいと喧嘩した
る？あの時よりマシだよ。」

笑いながら話す一樹に対して隆は引きつった顔で答えた。

隆「あの時よりマシじゃないのがあったら教えてくれ！でも7人ぐ
らいぶっ飛ばしたあたりから記憶がないから、起きたときゴミ箱に
尻がハマッテ抜けねえし前歯は三本ねえで最悪だったぞ！」

一樹「まあよくもまああの時あの程度の怪我ですんだよな・・・じゃ
あそろそろ近くなつたし気づかれないうちに奇襲と行きますか！」
隆「いつせーのっせ！」

掛け声と同時に走り出した二人は一番手前にいる奴を隆が頭めがけ
てフルスイングした！金属バットとシャッターに挟まれた頭部は半
分以上潰れて脳髓等が飛び出しヒクヒクと痙攣した。一樹は一番奥
にいる奴を木刀で叩きつけたが死には至らなく何度も木刀を頭に叩
きつけた！嫌な音と共に動かなくなり、前に目を向けた瞬間もう一
体のゾンビが掴みかかってきた！

隆「一樹！」

一樹「くそお~~~~~！」

思いのほかゾンビの力が強く首筋にゾンビの口が届くとゆう所で、
高い音が鳴る！

『バチチチチチ！』

その瞬間ゾンビが小刻みに震えた！その隙にゾンビの首をありえな
い角度まで回し鈍い音が響き、力なく崩れ落ちた。

隆「ありがとうは？」

一樹「手なんか借さなければかつこいい逆転劇が見れたのに残念だ
つたな。」

隆「そりや残念。」

そう言つと一樹に手を差し出した。二人は目が合い微笑すると隆が手を引つ張り上げ一樹を起こした。

一樹「さあ急ごう！ここにいたらほかのゾンビが寄ってくる！」

二人は裏口に回るとドアの前に立ち軽くノックして声をかけた。

一樹「俺だ、開けてくれ。」

少しの間がありドアが開いた。

店員「良かった無事でしたか。そんなに血が、怪我は？」

一樹「ああ怪我はないよ返り血だけだから、心配しなくていいよ。」

二人が中に入るとドアを閉め鍵をかけた。二人はトイレの洗面所で汚れを取ると隆が売り物のタオルを見た。

隆「ねえこれいくら？」

店員「こうゆう時ですからお金は要らないですよ。良かったら何か飲みますか？お店ですけどね。」

隆「そつか、サンキュー。」

タオルで顔を拭きながらビールを取り出していた。

一樹「酒飲むなら少しにしとけよ、感覚鈍るからな。」

一樹もタオルを手に取り色々物色していた。

隆「俺、板垣 隆^{いたがきたかし}23才宜しく。君は？」

一樹「そおいや俺も自己紹介してなかった、岡村 一樹^{おかむらかずき}今日で24才だ。」

店員「僕、江田 正志^{えだまさし}18才高三です。岡村さん最悪な誕生日でしたね。」

一樹「一樹でいいよ、そおだよ最悪な誕生日だよ。」

隆「俺も、隆でいいよ。まあ人生一度くらいこうゆうのあつてもおかしくないんじゃない？」

一樹「あつてたまるかこんな日！！まあいいとりあえず今後の事を話そう。」

隆「今後？ここにいればいいじゃん、わざわざ危険を冒す事ないんじゃないねえか？」

正志「そおですよここなら飲み物もあるし食料だってあるから助け

がくるまでもちますよ。」

それを聞いた一樹は黙っていたが少し考えて言った。

一樹「誰が助けに来るんだ？警察か？自衛隊か？S A Tか？軽く考えるな、最悪なシナリオで動かないと死ぬぞ！」

二人は何かを考えて黙っていた。

一樹「そのままでもいいから聞いてくれ、俺は助けたい奴、生きてるか確認したい奴がいる。お前らはいないのか？正志、誰かと連絡取れたのか？」

正志「ずっと電話がつながらなくて誰とも……」

隆「メールなら送信できるぜ。」

正志「本当ですか？ちよつと送ってみます。」

その時一樹が携帯を見るとメールが三件あった。

信「何かあったかあ？昨日は楽しかったけど二日酔いで頭痛いつつの。早く仕事切り上げて帰るかなあ。」

兄貴「一樹こつちはみんないるぞ。たまたま実家に来る途中にゾンビ？みたいな奴等に襲われたけど全員ぶつ殺してやった。とりあえず親父とかは話しを信用していないが家の中にバリケードを作ったから簡単にはあいつ等も入ってこれないだろう。お前は無事か？安全な場所にいるのか？ここにこれるのか？返事待ってる。」

直美「やつほゝいなんだいおじさあゝん。こつちは大勢の急患だからで忙しいよお。こんだけの人数が急患で来るぐらいだからT Vでなにかやってるかと思ったらテレビ映らないしさあ。あつそろそろ仕事戻るね、終わったら連絡するよお。」

一樹「良かったみんな生きてた。隆、T V映るか？」

隆「だめだ映らねえ、携帯、電気、ガス、水道は生きてんのになんでT Vは映らねえんだ？」

正志「ラジオもなんか少し聞こえるんですがダメでした。」

一樹「そうか……。とりあえず連絡したい奴にはメールしとけ、俺は直美が働いてる病院に行こうと思う。なんか急患が結構いるらしいからそいつらがゾンビになりかねないしあれだけ人が多く集まる

場所だ危険じゃないはずがないからな。」

隆「お前正気か！？外はゾンビがいるんだぞ！この人通りが少ない所でさえいるんだぞ、まして街の病院って言ったらかなり人がいるんだ！わかるか？って事はゾンビも比例して多いって事だ！」

一樹「ついてきてくれなんて言わないさ、俺が好きで勝手にやるんだからな。お前等はここで待っててくれ何かあつたらメールする。」

隆は唇をかみ締め何か色々考えていた・・・そこで最近流行りの歌が流れ、正志が携帯を見て少し黙っていたが一樹に聞いた。

正志「・・・一樹さん病院ってどこですか？」

震えた声で一樹に聞く。

一樹「三駅先の第一総合病院だけど、何で？」

正志「第一総合病院なら、僕も一緒に行きます！いや連れてってください！僕も自分の家に行きたいんです。お願いします！」

隆「おい、急にどおしたんだよ？」

正志「たしか噛まれた人はゾンビになっちゃうんですよ？」

一樹「ゾンビになるまでの時間までは分からないが多分噛まれたらゾンビになる。」

正志「今母さんからメールがあつて家には家族全員無事に立て籠もっているとの内容でした。」

隆「良かったじゃん！家は近いのか？でもそれと病院に行くのとの何の関係があるんだ！？」

正志「メールはそれだけじゃなかったんですよ、隣の家のおじさんがさつき噛まれた所を助けて一緒にいるらしいんです。」

一樹「噛まれたのは何時だ？あとこの店長が出勤してきたのは何時だ？」

正志「えつと隣のおじさんは何時に噛まれたかは詳しく分かりませんがメール着たのが15：00だからその少し前です。店長は8：00に出勤してきました。」

一樹「店長が噛まれてゾンビになったのが昼頃・・・約4時間か。今15：30急がないと怪我の酷さで早くなるかもしれないからな。」

準備しろ！荷物は多過ぎず動きやすい量にしろ！」

正志「はい！」

隆「おい！って事はまず正志の家に行ってその噛まれたおっさん
どうにかしてそのまま病院に行って直美と合流って事か？正志の所
はメールでそいつがゾンビになるから気をつけろとかじゃダメなの
？」

正志「実は父は体が悪く寝たきりなんです、母は多分信じてくれな
いだろうし、妹にはなにかあった時何も出来ないと思うんです。だ
から俺がどうにかしないと。」

隆「はあー、分かったよ。三人で行けばなんとかなんだろう！お前等
に付き合うよ。」

正志「ありがとうございます！」

二人の会話を携帯を操作しながら聞いていたが何も一樹は言わな
かった。

隆「お前はなんか言う事ないのかよ！さすがにシカトは切ないぞ！」

一樹はそれに対して微笑し言った。

一樹「俺が行くのにお前がついてきてくれない訳ないの分かってる
からな。ほら早く荷物まとめろよ、すぐに出るぞ。」

そお言つて一樹は携帯でメールを送った。

『兄貴、俺は無事だ。家の近くのコンビニに籠城してる、ここは水
も食料もあるしゾンビ共にバリケードを破られる事はないと思う。
だけど予定が変わって第一総合病院に行くことにした。そっちに行
くことがある時はメールする。何もなくても数時間に一回は必ずメ
ールする。みんな生きててくれて良かった。』

『信、今お前どこだ？今から言う事は嘘じゃないから絶対に信用し
てくれ。俺の家の辺りにはゾンビだらけだからそこが安全ならこっ
ちには来るな。隆も無事で一緒にいる、直美は仕事先にいるがメー
ルが返ってきたから無事だと思う。また連絡する。無事でよかった。』

『直美、今から言う事は嘘じゃないから絶対に信用してくれ。俺の家の辺りにはゾンビだらけだからそこが安全ならこっちには来るな。隆も無事で一緒にいる、あと急患が多いと言っていたがそいつらはゾンビになる可能性があるから気をつけてくれ。今から病院に行くから無事ならメールくれ。また連絡する。』

隆「お前って性格悪いな、」隆君ありがとう！君が来てくれるなら100人力だよ」ぐらい言えないかねえ。」

似てない一樹のモノマネをしたが一樹は無視して正志に聞いた。

一樹「家はどこ？近くに交番とか警察署とかある？」

正志「家は病院に行く途中の真ん中ぐらいです。交番は近くじゃないんですが、向かう途中に警察署がありますよ。」

隆「交番とか警察署がなんなの？この状態じゃ誰も助けしてくれないだろ。」

一樹「俺等が今必要なのは助けじゃない武器だ！警察署の中は多分ゾンビが必ずと言っていいほどいるだろうが近くにいけば警官のゾンビはいるだろう、そいつから拝借ってな訳。」

隆「なるほどそれならあんまり危険もないしな。ただ弾が少ないな。まあないよりマシか。」

正志「でも拳銃にはたしかワイヤーがついてるから外せないですよ。」

一樹「知らないのか？あれ三重のフックになっただけで、すぐ外せないけど外せるんだぞ。まあ念のため万能ハサミが売るほどあったから持って行くけどな。」

隆「売ってんだって。」

タイミング良くツツコミをいれ気分上々だったがシャッターから激しい音が聞こえた。

一樹「外にゾンビがいないのがベストだったが時間もないしな、行くしかないか！まずは警察署を通して正志の家だ！その後第一総合病院だ気を抜くなよ行くぞ！！」

隆「おう！」

正志「はい！」

三人は裏口が安全かどうか確かめ警戒しながら通りに出るとシャッターの前に一体ゾンビが立っていたが一樹が木刀で脳天を叩き割った。

一樹「よし大通りに出るぞ。」

辺りはネズミ一匹いないのになにかいる気配が漂う中三人は大通りに出てそこで三人は驚愕した。

3・作戦（後書き）

何か小説について気になる点やこつなったら面白い等思つことがありましたらメッセージを頂けたら幸いです。

4・戦闘開始

隆「なんだこれ・・・」

近くには居ないものの辺りはどこを見てもゾンビがいる。うろつく奴、立ち止まってる奴、人であったものを貪りつく奴、まさに地獄絵図だった。

正志「こんなんではいけないんじゃないか？」

隆と正志が愕然としている最中一樹は注意深く観察し20m先の歩道脇に止まる一台の車を見つけた。

一樹「気を抜くな！こんだけ広い通りなら全体を二重にも囲まれなければ走って逃げれる。それと提案がある。あそこに黒い1BOXの車が見えるな、あれに乗って行こう。」

隆「おいおい良く考えろよ映画じゃないんだ最近の乗用車は直結できねえぞ！商業車ならともかくな。」

正志「でもなんとかしないと家まで走りっぱなしじゃ体力が持ちませんよ。その商業車ってやつを探しましょうよ。」

隆が呆れた顔で正志に言った。

隆「このゾンビだらけの中で商業車を探しながら進んでたら少しも行かないうちにGAME OVERだ。」

ジェスチャーで両掌を上に向け肩まで上げた。すると一樹がその会話に割って入った。

一樹「あの車にはゾンビが一体乗ってるんだよ。」

隆「だからどうした？」

一樹「そのゾンビはどうやって車に乗った？丁寧にドアまで閉めたのか？いくつか考えれるのは噛まれた奴がただ鍵が開いていて車の中に逃げ込んだままゾンビになったか、噛まれた奴が今乗っている車の所有者かだ！まあ他にいくつか例はあるがな。どっちにしろ鍵がある可能性は限りなく低いんだけどな。」

二人は一緒に唾を飲み込んだ。

正志「分かりました、でも誰が行きます？みんなで行った方がいいですか？」

一樹「考えはある、一つは誰か一人で行って鍵があれば中のゾンビを撃退しバックでここに戻り残る二人を乗せて出発だ。もう一つは三人で行って鍵があればゾンビ撃退、出発だ。」

隆「鍵がなければ？」

一樹「分かるだろ、目的地に向かって全力で走れ！さあどっちにする？もお時間が勿体無い、決めなけりや俺が一人で行くぞ。」

隆「俺は行くぜ！一人よりはマシだろ。なあ。」

考える間もなく隆が言って正志に同意を求めた。

正志「ですね。」

一樹「鍵が付いていたら俺が中のゾンビを殺るからお前等は近づくゾンビを頼んだ。じゃあ行くぞ！．．．１．２．３！」

掛け声と共に周囲のゾンビに気づかれないうちに車に近づいた。

車に着くと車中のゾンビには気づかれたが他のゾンビには気づかれていなかった。

一樹「こっち側じゃ鍵の場所が見えねえ！逆に回るしかないが絶対に見つかっちまうな。」

舌打ちをしたあと周囲のゾンビが多すぎて一樹の顔色が悪くなっていた。

隆「ここまできたんだから引き返せねえんだ行くしかねえだろ！もし鍵があっても間に合わなかったら走って逃げればいい。」

同じ考えなのか正志が一樹を見て頷いた。

一樹「よし．．．１．２．３」

一斉に運転席側に回り込むと鍵がついているのが確認できたが肝心のドアの鍵が開いていなかった。

隆「早くしろよ近づいてきたぞ！」

口から異様な物を垂らしゾンビ特有の両手を前に突き出しながら迫っているのを金属バットを握り締めて構えていた。

一樹「くそ！これしかないか！」

一樹は木刀を構えると運転席側の窓を叩き割った！それと同時に中のゾンビが上半身を外に投げ出してきて一樹に飛び掛ってきた。そのころ後ろでは隆と正志がまだ数こそ少ないがゾンビと奮闘中だった。

正志「このやろお！死ねえ〜！」

コンビニから持ってきたモップで攻撃していたが全く効きもせずゾンビは足を止める事はなかった。

正志「隆さん、モップじゃ無理ですよ〜！」

隆は回りに居たゾンビ三体目を、金属バットで頭を叩き割った所だった。

隆「これ使え。」

隆は正志に向かって金属バットを放った。

正志「でもそれじゃ隆さんは？」

受け取ったと同時に目の前にいたゾンビの脳天に叩きつけ絶命させて言った。

隆「俺こう見えてもちよっぴり強いんだよ。」

4体で群がって近づいてくるゾンビに向かって走り出し手前の奴の顎にアッパーを入れ、隣の奴にの横面に右足刀を入れ、そのままの勢いでその後ろにいたゾンビに左後ろ回し蹴りを頭部に入れ、最後の一体は踵落としに行くまでの工程で顎を蹴り上げそのまま上を向いた顔面に打ち下ろし地面に叩きつけ一瞬にして4体のゾンビは動かなくなっていた。正志は一つ大きく呼吸をして死に絶えたゾンビを見て言った

隆「まあこんなもんかな。」

正志「すげえ！隆さんも一樹さんも強すぎ。」

隆「バカ！後ろ〜！」

正志が後ろを振り返った瞬間一体のゾンビが目と鼻の先まで近づいていた・・・が正志は半歩引き金属バットを左腰に引き収め一閃しゾンビの頭上半分を切り？落とした。

正志「あつぶねえ〜。死ぬかと思った。」

隆「お前すげえじゃん！剣道なんかやってたん？」

正志「いや親父が居合いの免許皆伝で道場もやっていたんで、小さい頃から教えられてたんですよ。隆さんと一樹さんには負けますけどね。」

隆「俺は昔空手を習ってたんだけどどうも顔面攻撃なしがしっくりなくて辞めちまった。一樹はなんもやってないんだけど俺が今まで会った中でとびつきり強えぞ。」

正志「そおなんですか、二人を見てたらこの先大丈夫な気がしてきました。」

隆「俺もそお思ってきた。さて今度は数が半端じゃねえぞ、気合入れてけよ。」

正志「はい！」

二人には数えきれないほどのゾンビが近づいてきていた。

一樹「くっそお・・・」

一樹は車の中のゾンビに不意をつかれ後ろに跳び難を逃れたが、背後からきたゾンビに掴まれてしまった。だが強引にゾンビの頭を掴み強引に首をへし折りゾンビは崩れ落ちた。車の回りにはゾンビが寄ってきていたが一樹は気にも留めず車の近くにいるゾンビを殴りつけたあと木刀で回りにいるゾンビの脳天を叩き割った！最後に車中にあるゾンビの顔面に木刀を突き刺し動かない事を確認すると一樹は叫んだ！

一樹「こっちはOKだ早く・・・」

一樹が言い切る前に二人は猛スピードでこちらに走ってきた。後ろからは数え切れない程のゾンビが向かってきていた。

隆「もあんな数はさすがに無理だ！早く行こう！」

一樹は必死に運転席にいるゾンビをどかさうと試みるが中々上手くいかない。そうこうしているうちにゾンビはもうそこまで来ていた。

一樹「よしどいたぞ！乗り込むぞ！」

車中にいたゾンビをなんとかどかし乗り込もうとした時。

一樹「正志大丈夫か？怪我不いか？」

正志「怪我はないですよ。二人は？」

一樹「こっちは大丈夫だ、無事で良かった。」

正志「もお終わりだっと思って思った瞬間エンジンがかかったんですよ。映画のワンシーンみたいです。」

隆「バカ野郎！無茶しやがって死んでたらどおすんだよ！」

正志「ごめんなさい。」

一樹「まあまあみんな無事だったんだから結果オーライでしょ。でもまあ隆は泣くほど心配してたみたいけど。」

正志「隆さんが・・・泣いた？」

隆「泣いてねえよ！てめえ何言ってるんだよ！俺はただ心配しただけだ。」

正志「隆さんごめんなさい今度からはそおゆう事がないようにします。」

隆「分かればいいんだよ、助かって良かったよ・・・一樹、さっきは、なんてゆうか言い過ぎた悪かったよ。」

鼻の頭を指でいじりながら一樹を見ないように言った。

一樹「今もお前あれもお前だろ、嫌ならこんなに長く付き合ってねえよ。」

微笑しながら隆を見ている一樹を横目に隆は照れ隠しにバックを取り出し一気にミネラルウォーターを飲み干した。三人が乗った車は大通りを走っていった。少し慣れない運転で蛇行しつつ走る車をゾンビが近くにいない比較的安全な場所に車を停車するよう指示した。

隆「よしその辺でいいだろ、運転変わろう。」

正志「怖かった。」

緊張が途切れたのか大きく息を吐き肩を落とし首を鳴らし後ろの席に移動していた。

一樹「正志の運転の方がゾンビより怖かったかもな。」

正志「ああそおですよお仮免三回も落ちましたが何かご不満でも」

！
」

少し頬を膨らまし目を細めながら一樹を睨みながら言った。

一樹「正志さんがいなかったら僕たち助からなかったですよ、感謝感謝。なあ隆？」

隆「そおそおゾンビに囲まれた時も凄かったんだぜ！居合いを習ってるらしく達人みたく金属バットでゾンビを切る切る。見せたかったなあ。」

隆は運転席に乗り込みながらそう言うつと慣れた手付きで車を走らせる。

一樹「へえ、そりや凄えな、じゃあ木刀は正志に渡しておいた方がいいな。でもさっきみたいない無茶はするなよ。」

木刀を正志に渡し正志は木刀を見ながら言う。

正志「二人の格闘術？とゆうか運動神経がいいとゆうか僕なんか足元にも及ばないですよ。」

隆「実戦経験が豊富なかただよ、俺も一樹もな。そおだ正志、一樹にあれ見せてやれよ。」

持ってきたバツクの中から正志は一本のベルトを出した。

正志「ジャーン！これはなんでしょう？」

一樹「あつ！拳銃じゃん！どうしたんだそれ？」

なんでそれをお前等が持つてるんだとゆう驚きの表情で聞いた。

隆「実はさっきの殺したゾンビの中に警察がいて銃だけ取る暇がなかったからベルトごと無理やり引きちぎってきた。」

得意げに隆が言うつと一樹は警察が使っている拳銃《ニューナンプ装弾数5発》を手に取り、付いていたワイヤーを万能ハサミで切った。使った事がない代物だったがなんとかリボルバーを出し弾薬を確認した。

一樹「ラッキー！全部はいつてるぞ！」

隆「一発だけ弾頭がないのないか？一発だけ空砲が入ってるって聞いた事あるぞ。」

弾薬を全部出し調べたが全て弾頭はあった。

一樹「全部あるぞ、噂なんじゃねえの？でも五発じゃこの先はやっぱ辛い。」

隆「まあいいそれは一樹が持つてろよ一番無茶しそうだな。」

一樹「わかった。でもどこに入れときゃいいんだ？ズボンに差しとくのか？」

色々なところに入れたりするが中々いい所が見つからない。

正志「拳銃が入っていたホルダーをベルトに付けたらどうですか」
なるほど何度か小さく頷くとベルトからホルダーを外し自分のベルトの右側にホルダーをつけてその中にニューナンプを収めた。
一樹「どお？かつこよくない。」

隆「いいじゃん、でもこのままで行くと病院に着くの暗くなっちゃうから弾薬はもつとほしいな。」

急な事に対応出来るようにスピードを出し過ぎないように注意して走っていた。

一樹「正志警察署はもお近いか？どのくらいだ？」

正志「あと信号二つ目の左側にあります。」

前に体を取り出して先の信号を見ながら指を差して言った。だが丁度そのあたりにはゾンビが何十体も集まっていた。

一樹「停まらないであいつら跳ねちまえ！でもスピード出しすぎるなよ！フロントガラスが割れたり、事故したら洒落にならねえからな。」

隆「OK捕まってるよお！」

車は少しスピードを出しそのゾンビ群に突っ込んで行った！ドガガガガガッ！とゆう激しい音を撒き散らし半数以上のゾンビを跳ね飛ばし、フロントガラスには血や体の何処かの箇所であった物が付いていたがワイパーで取り除いた。

隆「気持ち悪い！ゾンビでも跳ねるもんじゃねえなあ。」

一樹「隆！ウターンしてあそこにいるゾンビを蹴散らさない事には何も出来ないぞ！」

隆「分かってるって！俺のドラテク《ドライビングテクニク》を

なめんじやねえぞ！」

隆はハンドルを急激に切りサイドブレーキを上げアクセルワークとブレーキングで綺麗なスピターンをして再びこちらに向かってきていたゾンビもろ共跳ね飛ばして行っただけ！何度かそれを繰り返していくと辺りには動いているゾンビはいなくなっただけ。

隆「こんなもんかな？」

一樹と正志は衝撃で色々な所をぶつけたが大した怪我ではなさそうだった。車体は至る所が凹みフロント部分は元の形がわからないぐらいになっていたが走行するのに支障はなさそうだった。

一樹「よし、そうしたらあの鉄格子の門に鉄の扉があるんだがそこに運転席側を付けられるか？」

隆「余裕！」

車はもはや動くことのないゾンビ達の上を乗り上げ、警察署正面右側にある鉄格子で出来た門にある鉄の扉に車を寄せた。

一樹「いくつか言う事がある聞いてくれ、まずこの中には三人が入る。隆、鍵を抜いて足元にでも隠してくれ。これで他の二人がやられたとしても一人はここまで来れば逃げられるし、やられた奴が鍵を持ってたら最悪だからな。」

正志「だったら鍵を付けっぱなしの方がいいんじゃないですか？」

一樹「まあ聞け、この中には多分ゾンビもいるかもしれないが生存者もいると思う、なぜならゾンビが集まっていたからだ。もし鍵をつけたままで中に入って生存者に車を乗って行かれる危険性もあるからな。」

正志「なるほど、だからか。」

隆「中には生存者がいるんだろ？だったらそいつ等が銃や弾丸をくれるか分かんないぜ。何人いるかも分かんねえし。」

一樹「だから聞け！そいつ等がもし分けてくれなければ奪うまで！全てじゃないがな。あと一番面倒くさいのが生き残りの警官かな、妙に正義感が強いから一番銃を渡すのを拒否するかもな。以上だ何かあるか？」

隆「いいよそれで行こう。」

正志「僕も大丈夫です。」

車のドアを開けるとちよつとやさつとじゃ壊れなそうな鉄の扉が威圧感を放ち来るものを拒むかのようにそこにあった。

4・戦闘開始（後書き）

何か小説について気になる点やこうなったら面白い等思っていることがありましたらメッセージを頂けたら幸いです。

5・侵入

隆「どうやって開けるんだ？鍵もでないし。」

一樹はバックから携帯のガスバーナーを出しそれを着火させるとそれを錠前に当て続けて真っ赤になったところでミネラルウォーターをかけた。冷えて固まった錠前にまたガスバーナーを当て続け真っ赤になった所でミネラルウォーターをかけた。そこで錠前に異変が起こった！バキッ！とゆう音を立てて割れたのだ！それを金属バットで軽く叩くと錠前は脆くも崩れ去った。

一樹「入るぞ！」

隆「何でそんな簡単に壊れたんだ。」

正志「なんかTVで見たことありますよ、金属はかなりの温度高低差が何度も起きると金属疲労を起こして脆くなるって。」

一樹「そおゆうこと。俺もそのTV見てたんだよ、まさかこんなに上手くいくとは思わなかったけどな。」

隆「なんだよ出来るって分かってなかったのかよ！出来なかったらどおしてたんだよ！」

一樹「まあなんとかなったから結果オーライで。」

そう言って一樹がニューナンプを手に先頭で敷地内に入って行くのを正志は腰に木刀を差し後ろを着いて行く。呆れた顔の隆が金属バットを握り後ろを振り向きながら警戒し中に入って行った。三人は正面右側にガラスで出来た両開きの大きな入り口を見つけたが中から机や椅子等で作られたバリケードを見つけた。

一樹「バリケードがあるって事は少なくとも中には生存者がいたって事だな。けどこのバリケードを壊すとゾンビも中に入り込んでくる可能性もあるからここはダメだな。」

正志「生存者がいたって何で過去形なんですか？何処か別の場所に避難したってことですか？」

隆「それもあるかもしれないが中にいた何人かがゾンビになって全

滅したって事かもな。さつき俺等が外であんだけ大きな音立てたのに誰も窓から覗いてないのは不思議だろ？」

それを聞いた正志は生唾を飲み込み冷や汗が一筋額から頬に垂れた。

一樹「隆、あの二階の窓の回りはバリケードもないし破ってもゾンビはあそこから入ってこれないから、あの窓から入るか。」

隆「そあだな。」

正志「どうやってあそこまで行くつもりですか？ハシゴか何かないと無理ですよ。」

一樹は窓側の壁から離れると壁に走り出し壁を走るかのように一歩、二歩と蹴り上げると窓の下にある出っ張りを掴むとそこに軽やかに上りきった。

一樹「隆！」

一樹に呼ばれると隆も壁から離れると壁に走り出し壁を一步駆け上がると差し出された一樹の手を握りいっきに上りきった。

一樹「正志！大丈夫だ来い！」

正志も壁に走り出し壁を蹴り上げるが伸ばされた手には届かなかった。裏から呻き声と共に何かが滴り落ちる音が聞こえてきた。

一樹「急げ！」

正志は一心不乱に走り壁を蹴るが手には届かず背中から地面に落ち木刀も落としてしまった。タイミング良く一体のゾンビが正志に近づいてきた。

隆「正志！早く木刀を拾え！」

正志は中々体勢が直せず木刀を見つけれない！ゾンビが正志に覆いかぶさろうとした瞬間！パーンンン！乾いた音が鳴り響きゾンビの右頭部に小さな穴が開きゾンビはそのまま倒れこむ。

一樹「初めて撃ったけど反動も軽いしエアガンと大して変わらないみたいだな。」

窓の所でニューナンプを構えた一樹が言った。一樹はそこから飛び降りると正志に手を差し出し起き上がらせた。

一樹「さっきの車の貸しは返したからな。」

笑いながら言う正志もつられて笑った。二人は窓の下まで行き一樹は正志の腰を持ち正志が跳ぶのと同時に上に放った！正志は隆の手を取り上った。一樹は落ちていた木刀を拾うと正志に投げて渡した。

一樹「もお落とすなよ。つてか正志身長が低いんじゃないか？」

一樹は身長180cmぐらいで隆は170cm後半はあったが正志は170cmあるかないかぐらいだった。

正志「家系なんですよ身長低いのは！ほつといてくださいよお。」

正志は口を尖らせて言った。一樹は窓側の壁から離れると壁に走り出し壁を走るかのように一歩、二歩と蹴り上げると窓の下にある出っ張りを掴むとそこに軽やかに上りきった。

一樹「悪かったよ謝るよ。じゃあさて入るか。」

隆が部屋の中にゾンビがいないかを確認すると、鍵の部分を金属バットで叩き割ると同時に建物内に警報が鳴り響いた。

隆「やつべ！」

一樹「やつぱりな、多分こうなると思ってた。」

隆「だったら先に言えよマジ心臓止まるかと思っただろ！つてかこの音マズインじゃねえか？ゾンビ共が集まってきちまうぞ！」

一樹「そおだな急ごう！」

窓には犯人逃走防止のパイプが付いていたがなんとか中に入る事ができた。鳴り響いていた警報は鳴り止んだ。

隆「誰が消したんだ。」

一樹「自動的に時間で消えるか生存者が消したんだろう。ここにはゾンビはいなさうだな、ここは何の部屋だ？まあいい何か使える物がないか探すぞ。」

三人は机の中や棚の中を調べた。

正志「一樹さん何かスポーツとかやってたんですか？運動神経かなりいいし普通二階に何もなしで上れないですよ。」

隆「こいつ子供の頃病弱で運動とかしちやいけなかったらしいよ、

写真見るとガリガリで笑えるぞ。」

一樹「ほっとけ！」

隆「中学から一緒にいるんだけど部活はお互いやらなかったけど中三の時に体育の時100m走と幅跳びで日本新記録を越して色々話題になって大変だったよな。あとは喧嘩の時も人並外れた動きでだいたい一撃で決めてたもんな。」

正志「失礼ですけど二人は不良なんですか？」

隆「不良か懐かしい響きだね一樹君、ってか今は違うから過去形にはしてほしいなあ。」

一樹「無駄口叩いてる時間なんてねえぞ！」

昔話しが恥ずかしいのか会話を無理やり止めさせるかのように声を上げた。そこで正志が奥の部屋で壁に架かっているBOXの中に鍵を見つけた。

正志「鍵の束見つけましたけど役に立ちますか？」

一つ一つには所長室や倉庫等がしるされていた。

一樹「大収穫だ、よくやったな。」

ふと奥の机の下から片足だけだが靴が見えた。一樹はそれに気づくとホルダーからニューナンプを抜くと机に標準を合わせながら近づいていった。

正志「人？ゾンビ？生きてる？」

一樹「わからんがゾンビかもしれないから気をつけろよ。」

机の後ろに回ると警官が頭から血を流して倒れていた。一樹は机の上にあつた灰皿をその警官に投げつけ当たりはするものの反応がない。

一樹「死んでるみたいだな、あたまを何かで何度も殴られてる様子からこいつはゾンビにでもなったか？」

一樹はニューナンプをホルダーに収め警官を観察したら腰にはあるはずの拳銃は無理やりワイヤーを千切られた跡があつた。

隆「何やってんだ？こっちは懐中電灯と警棒とタバコぐらいしかなかったぞ。」

一樹「じゃあここを出て地下1階に行くぞ！」

隆「なんで地下？」

一樹「さっき壁に建物の構造部が書いてあったんだが3階と2階と1階は全てが部署とかそうゆう部屋しか書いてなかったが地下1階には何部屋か空欄があった、正志が見つけた鍵には地下って書いてあるからどれかがそれっぽいだろ？多分どれかが拳銃の保管場所だ。」

正志「頭良い。」

一樹「さあいくぞ、大体構造は頭に入れたけど何があるかわからないんだ、気をつけろよ。」

三人は部屋を出ると廊下にはどこからか風に乗っていくつかの呻き声が聞こえた。その時時計の針は16:20を指していた。

隆「うじゃうじゃいたらやばいな。」

正志「警察署ですからかなり人がいたでしょうからもしかするとかなりの数がいるかも。」

三人は階段に向かうと前から二体警官のゾンビが向かってきたが一体は一樹が頭部に上段蹴りを入れそのまま地面に叩きつけ絶命させた。もう一体は正志の腰から一閃に放たれた木刀はゾンビの首を切り落とした。

一樹「居合いつてすげえな木刀なのに首切り落とせるのかよ。ってか始め会った時よりなんか遅くなってるじゃないか？」

正志「そりゃ最初は怖くてたまらなかったんですけど二人を見てると何か勇氣とゆうか自信が出てきて。こいつらに殺されてたまるか！みたいな気持ちになったんです。後居合いは用はタイミングとスピードですよ、一樹さんも少しやればこのぐらい簡単に出来ますよ運動神経良いし。」

何もしなかった隆は倒れているゾンビを何かゴソゴソとしている。隆「ラッキー！拳銃二丁見つけ！両方とも弾丸満タンだぜ！」

そお言つと一つを正志に渡した。

正志「僕当てられる自信ないですよお、一樹さんが持ってた方が

役に立つんじゃないですか。」

一樹「あれ？勇気？自信？ん？」

正志「わかりましたよやりますよやればいいんですよ！」

半ば投げやりになる正志に隆はゾンビから取ったホルダーを渡した。

隆「出来るなら俺には銃口向けなくてくれよな。」

笑いながら隆はホルダーをベルトにホルダーを取り付けニューナ
ンブを収めた。

正志「ゾンビと間違えなければ大丈夫じゃないですかあ。」

正志も笑いながら答えるとベルトにホルダーを取り付けニューナ
ンブを収めた。階段を下りていくと一階の正面玄関とお客様窓口の
プレートが見えた。そこには想像よりも多くのゾンビが群がってい
た。

隆「マジかよ中には警官のゾンビもいるけどあんなにいたら拳銃奪
ってるうちにやられちゃうぞ！」

一樹「今なら階段の回りには一体もないから素早く下りれば見つ
からないで行けるだろ。」

正志「もし見つからず下りれても帰りはどうします？またタイミン
グ良く階段回りにはいないですかね？」

一樹「さあな、だけどここまで来たら行くしかないだろ。」

三人は沈黙の中頷き合って目で合図を送るとタイミングをみて一
斉に下の階段まで駆け下りた。運良く見つからず下りる事ができた
が階段の途中で一樹の目の前にゾンビが現れ咄嗟に跳びゾンビの頭
を両手で鷲掴みにすると顔面に右膝入れてそのまま1階と地下1階
の間の踊り場まで一緒に跳んで行くと地面にそのまま叩きつけた！
ゾンビの頭から足を退かすと半分以上も潰れていた。

一樹「行くぞ！」

三人は地下1階に下りると目の前には一本の廊下があったが奥に
は数体のゾンビがいた。

一樹「多分今ゾンビがいる辺りが拳銃の保管場所だな。あそこに集

まってるって事は中に先客がいるかもな。」

隆「とりあえず行つて見るしかないだろ。今は拳銃は使わない方がいいな、上の奴等が下りてきたら俺等終わりだぜ。」

真つ直ぐに廊下は伸びていたので隠れる場所もなかった三人は奇襲をかけた！一樹は一体を右、左、右と殴りつけるとその奥にいる奴を隆が金属バットで脳天を叩き割り、その隣にいた奴を正志が下から上に木刀を跳ね上げるとゾンビの頭前半分が床に落ちる前にその後ろの奴に左肩から胸まで切り裂いた。だがそのゾンビは物ともせず正志に掴みかかる！正志は途中で止まってしまった木刀を離し後ろに退くと横から一樹が飛び出しその木刀を掴み力尽くで下まで切り落とすと、腰に木刀を引き一瞬止まったかと思ったらゾンビの首は床に落ち廊下に静寂が訪れた。

一樹「これで全部か？」

呆気にとられていたのか少し間があり隆は答えた。

隆「あ．．ああそおみいだな。」

倒れていたゾンビの中に警官はいたが拳銃は奪われていた。

一樹「じゃあここから入ってみるか。」

正志「一樹さんどつかで居合い習ってたんですか？僕にも太刀筋どころか抜刀したのでさえ見えなかった。」

一樹「いや、喧嘩で何度か使った事あるぐらいだよ。これサンキュ！。」

木刀を正志に返すと鍵を取り出していた。

正志「じゃあなんで僕と同じ居合い、いや僕よりも無駄がない居合いが出来るんですか！？」

一樹「ただ正志がやってるのを見てなんとなく出来そうだったから真似しただけだよ。そしたら出来た。」

小刻みに震えだし正志は声を上げた。

正志「一樹さん凄いよ！もし無事にこの問題が解決したら一緒にやりませんか？」

一樹「バカ！静かにしろ！．．．まあ考えとくよ。」

正志「はい！」

隆「いつからお前等は熱血君になったんだよ。」

隆はやれやれといった表情をした。一樹は鍵穴にいくつか鍵を指すと鍵穴が回転しカチャとゆう音が鳴る。

一樹「いきなりゾンビが出るかもしれないから気をつける。あと生存者がいたら俺等を撃ってくる可能性もあるからな！」

警戒しドアを開けるとそこには10畳くらいの部屋だった。中には誰もいなく左右と正面に両開きの頑丈そうなロッカーがあった。

人が荒らした痕跡はなく一樹が手前のロッカーに手をかけるが鍵がかかっていて開かなかった。

一樹「くそ！ここまできてこれか、この鍵は俺開けられねえぞ！ここにあるかもしれねえのに！」

すると隆が鍵穴をじっくり見てなにやらバックから取り出し鍵穴をいじっている。

一樹「何やって・・・」

小さな音が鳴り隆は一樹に言った。

隆「開いたぞ。」

一樹「はっ？」

一樹は目を丸くして驚いていたが扉に手をかけると見た目とは裏腹に軽い力で開き中が見えた。

一樹「ビンゴ！！隆他のも頼む！」

ロッカーの中にはニューナンプ三丁《装弾数5発》、コルト・ガバメント三丁《装弾数7発》、コルト・ガバメント用マガジン六個、弾丸38口径50発入り×2、45口径50発入り×2、防弾チョッキ六着、バック一個。

隆「全部開いたぞ、やったじゃん弾丸もいっぱいあるから一安心だな。」

他のロッカーも同じ物が入っていた。三人は慣れない手付きですべてに装弾させると各自同じく分けた。一樹は着ていた服の下に防弾チョッキを着込み手にはニューナンプを持ち、腰のホルダーにコ

ルト・ガバメントを入れ、ズボンの前にニューナンプを差し、バツクにコルト・ガバメント二丁ニューナンプ二丁を入れマガジン三個と余った弾丸ポケットにしまった。

正志は服の上から防弾チョッキを着込み、左側のベルトに木刀を差し、コルト・ガバメントを腰のホルダーに入れ、ズボンの前にもコルト・ガバメントを差し、ニューナンプ四丁、コルト・ガバメント一丁をバツクに入れ、マガジン三個と残りの弾丸をポケットに入れた。

隆は防弾チョッキを着ていた服の中に着込み、左手にニューナンプを持ち、右手には金属バットを握り、腰のホルダーにコルト・ガバメントを入れ、ズボンの前にもコルト・ガバメントを差し、ニューナンプ三丁、コルト・ガバメント一丁、をバツクに入れ、マガジン三個と残りの弾丸をポケットに入れた。

隆「結構重装備になつて安心は出来るがちと動き辛いな。」

各々の用意が終わると一樹が違う部屋から音がするのが聞こえた。一樹「二人ともオートの方は装弾させてセーフティかけとけよ。あと他の部屋も見てみるぞ、生存者がいるかもしれないしな。」

隆「おい、目的は果たしたんだ！他の奴等に構つてる暇なんてないだろ？正志の家に向かうぞ！」

一樹「なんか気になるんだよ、一応国家公務員だろ警察つてさ、警察の生き残りがいればもしかすると何でこうなつたか分かるかもしれないだろ。」

正志「その可能性はありますね、じゃあ急ぎましょう。」

隆は不満そうな顔をしていたが渋々二人に着いて行つた。

三人は部屋を出ると近くにあるドアに近づく。

一樹「押収物、保管庫？」

鍵を開け中に生存者やゾンビがいないのを確認すると辺りを見回した。中には柵が幾つか並んでいてダンボールが所狭しと並んでいた。

隆「押収物って事はやばい粉とか薬とかもあんのかなあ？」

隆はダンボールの中を覗いたりして言った。

一樹「ここには用はない次行くぞ！」

その部屋の向かいにある最後の部屋のドアに立ち鍵穴に鍵を差し込みカチャッとゆう音が鳴ってドアノブに手をかけた時、中からガタンとゆう音が聞こえた。

正志「誰かいますね確実に、ゾンビだったりして。」

一樹「入って見なければ分らん。」

一樹はゆつくりとドアを開けるとパーンと乾いた音が部屋中と廊下中に鳴り響いた！一樹は右胸に衝撃を受け後ろに倒れた！

正志「一樹さん！一樹さん！」

正志の呼びかけに一樹は反応がない。

隆「大丈夫だ俺はゾンビじゃない！助けに来たんだここから一緒に逃げよう！」

*「いやあゝ来ないで！」

*は部屋の奥から何度もこちらに向けて発砲した！全ての弾丸は壁等に当たった。何度目かにカチツカチツとゆう音が鳴り弾丸が尽き今度は拳銃を投げてきた。

隆「わかった銃は捨てていくからゆつくりそちに行く！良いな！」

隆が部屋の中に入ると奥の棚に後ろを向き震えて隠れている婦人警官がいた。隆はゆつくり近づくと後ろからやさしく抱きしめて言った。

隆「大丈夫、もお心配いらないよ。さあここから出て家に帰ろう。」

そうすると婦人警官は隆の方を振り向き胸の中で声を出して泣いた。隆はやさしく肩と頭に手を回し抱きしめてなだめていた。

一樹「隆！急げ銃声を聞いて一階の奴等が下りてきやがった！」

婦人警官が放った銃弾は右胸に当たってはいたが先ほど着た防弾チョッキの部分に当たっていた。だが衝撃が強かったのか軽く咳き込んでいた。

隆「もお平気なら少し急いだ方がいいみたいだ走れるかな？」

隆は婦人警官に聞くと少し落ち着いた婦人警官は頷いた。

隆「よしじゃあ行こう！」

隆は婦人警官の手を取り廊下に走り出た！

正志「隆さあ〜ん！こっちだあ〜！急げえ！」

正志は通路の真ん中にあるエレベーターの扉を開けて大きく手招きしていた。隆と婦人警官は全速力で走った！だがゾンビの大群の方がエレベーターに着くのは早かった。一番先に着いたゾンビを一樹がズボンから出したコルト・ガバメントで頭を打ち抜いた！

一樹「早くまだ間に合う！急げ！」

一樹はホルダーから出したコルト・ガバメントも持ち掴みかかってくるゾンビの額を打ち抜いた！それでもまだ押し寄せて来るゾンビの大群に正志もコルト・ガバメントを持ち応戦するが押されつつあった。

隆「一樹！先に行つててくれ！後から必ず行く！」

隆は走るのを止めて言った。

一樹「何バカなことやってんだよ急げ！」

隆「正志！一樹を頼んだぞ！」

そう言つと隆は婦人警官を連れてUターンして走つて言った。

一樹「隆〜〜〜〜！！！」

正志は両手でコルト・ガバメントを持ちゾンビに撃ち続けるが弾が尽きた、一樹はゾンビなんか構いもしないで隆の所に走り出す所を正志が止めてエレベーターの中に入れ、閉じるボタンを押した！閉じるドアに一体のゾンビが近づいてきが正志が一樹からコルト・ガバメントを無理やり奪つとゾンビに残弾全てをを撃ち込んだ！ゾンビが吹き飛ぶのと同時にドアが閉まり。正志は二階のボタンを押した。

一樹「何で隆を見捨てた！ふざけんなよ！てめえ！隆・・・行かないや・・・助けに行かないや・・・あいつ待つてるから行かないやダメなんだよお〜！」

正志に掴みかかり罵倒し目には涙が溜まっていた。正志は急に一樹の頬を殴りつけた！一樹は後ろの壁までよろめくとそこに座り込

んだと同時にエレベーターのドアは二階に着き開いた。

正志「殴ってすみません。でも隆さんが．．隆さんが僕に一樹さんを頼むって言ったんだ！だから僕は何があっても隆さんの代わりに一樹さんを護らなくちゃいけないんだ！」

ドアが閉じようとするのを正志が手でそれを阻止した、その目からは涙がこぼれ頬をつたっていた。

正志「一樹さん、隆さんは簡単にやられる人じゃない！短い間だけどあの人はそうゆう人だ！もし万が一隆さんが戻らなかつたとしても、一樹さんは直美さんだって助けに行かなくちゃならないんだ！だからこんなのあなたらしくないですよ。」

座り込んでいた一樹がスツと立ち上がりシャツの袖で顔を拭くと、正志を見て言った。

一樹「六つも年下に説教されるようじゃ俺も落ちぶれたな。正志！今から車に戻って隆を17：30まで待つ！もしそれまでに来なければ先に進むぞ！」

正志「一樹さあゝん。」

正志は立ち直った一樹を見て泣き崩れた。

一樹「泣いてる暇なんかないぞ！拳銃に装弾も済ましておけよ。」

正志「自分だつてさっきまで泣いてたくせに。」

一樹「何か言ったか？」

正志「いえ何も。」

二人は来た道を戻り車に向かった。現在17：05

5・侵入（後書き）

何か小説について気になる点やこつなったら面白い等思つことがありましたらメッセージを頂けたら幸いです。

6・脱出

その少し前

隆「あつたあつた。」

先程婦人警官を助けに行く時に置きっぱなしだった拳銃を拾い上げた。二人は押収物、保管庫に入り隆は鍵を閉め、棚を倒しドアの前に置いてバリケードを作った。

隆「よしとりあえずこれでいいな。そうだ自己紹介してなかったね、俺、板垣 隆年は^{いたがきたかし}23才君は？」

棚にあるダンボールを物色しながら聞いた。

婦人警官「．．多古 梨乃^{たこの}24才です。」

隆「梨乃さんか、一つ年上ならお姉さんだね。ん？今年24才？」

梨乃「今日誕生日です。」

隆「じゃあ同年だね俺も今年24才。ってか今日誕生日なの？」

梨乃「最悪な誕生日．．。」

梨乃はまた泣きだしてしまった。隆はどうしたらいいのか分からずとりあえず話し始めた。

隆「えーつとねさつき梨乃が撃った奴覚えてるかな？そいつも今日同じ誕生日なんだ。」

隆は昨日一樹の誕生日を一日間違えた事、ケーキを一樹の顔に押し付けた事等を話し今までの事を面白く話した。

隆「んで人がボケてもシカトしたりする奴なんだよあいつは。」

梨乃は隆の話を聞いているうちに少しづつ笑い始めた。

梨乃「一樹さんって方が本当に好きなんですネ、友達のことをそんなに楽しく話す人初めて見ましたよ。」

急に顔を近づけて隆が言った。

隆「やっと笑ったね、やっぱ可愛いじゃん。俺の目に狂いはなかったな！」

梨乃「やだ化粧ボロボロだし可愛くないから見ないでください。」

恥ずかしかったのか耳まで真っ赤にして横を向いた。

隆「あいつとはね中学からずっと一緒にいるんだけど、あいつの事は一番信用してるし、あいつがいなかったら今の俺はいないだろうしね。だから裏切ったり約束破りたくないんだよね今もこれからも。」

梨乃「いいなあそうゆうのって。」

隆「そおいや梨乃は何でここに？一人？」

少し黙った後話し始めた。

梨乃「今日は朝いつも通りに出勤してきて普段と変わらなかったんです。八時くらいから色々な所から暴漢が出たとか異常者がいるとかでみんな出勤していました。」

それがその異常者を連れて帰ってきた人達も所々怪我をしてしまっていて、異常者は言う事を聞かず暴れるのをやめなかったので留置場に入れました。中には他の方も入っていたんですか収容したらその人達に襲い掛かり噛み殺してしまっただんですよ。それで致し方なく発砲許可を取りたかったんですが、署長室にいるはずの署長に連絡が取れなくて・・・いや署長だけじゃなく部長等管理職の方々が見当たらず、一人の警官が致し方なく発砲しなるとかその場を収めたんですが、外にその異常者と同じ症状の人達が警察署に集まってきたんです。私達は必死にバリケードを作り何とかなっただんですが、他に出動した人達と連絡が取れなくなっていたんです。それで午後一時頃からまた異変が起こり始めたんです。怪我をして帰ってきた警官達が外の異常者と同じ症状になってたんです！

発砲するんですが中には一般の方もいらしたので中々撃てなかったりでみんな混乱してしまってもう何がなんだか分からなくなってきた。仲間の警官が私の手を取り地下のあの部屋に逃げ込んだんです。私の他に二人いたんですが武器庫の鍵を取りに行くと行って出て行ったまま戻ってきませんでした。それでずっと一人で隠れていたら隆さん達がきてもパニックになっちゃったんです。」

隆「そおだつたんだ．．．良く一人でがんばったね。」

梨乃「でも私のせいでこんな事になってしまつてすいません！私になんて構わなければ隆さん助かったのに．．．」

隆「ちよつと待つてよ、それじゃ俺達助からないみたいじゃん！」

梨乃「えっ？」

驚いた顔で隆を見る。どこからかダンボールを持ってきた。

隆「ジャジャーン！」

梨乃「何？これ？」

隆「爆弾じゃな？ダイナマイトつてて奴かな。」

ダンボールから一つ細長い片側からは導火線が出ているものを見て言った。

隆「さつきこの部屋に来た時目に入つたんだよねえ。威力は分からないけどこれでなんとか切り抜けてみせるよ。だから終わりだなんて言わないで俺を信じて。」

梨乃「隆さんが来なかつたら助からなかつたんだから隆さんに全て託します。」

その時ドアを叩く音が響いた。

隆「待つてくれたみたいないタイミングできやがつたな！」

爆発や爆風等から大丈夫のように部屋の奥に棚とダンボールを積んで壁を作った。

隆「梨乃、ここで待つて。俺が合図したら頭を低くして隠れて。あと万が一があるからこれ渡しておくよ。」

隆はコルト・ガバメントを梨乃に手渡し、ダンボールからダイナマイトを二本取り出した。

梨乃「隆さんは何を？」

隆「俺はお客さんが来たみたいだから、挨拶してくるよ。」

梨乃「気をつけて．．．」

隆「ありがと。」

隆は激しく叩かれるドアの前に立ち棚などバリケードを少しずらし、少しだけドアが開くようにして鍵をあけた。

隆「頼むぞ、上手くいってくれよ。」

ドアを開けると隙間から長い廊下を埋め尽くす程のゾンビが目に入った。隆はポケットからタバコを取り出し火をつけた。ドアの隙間からはゾンビ共の腕が飛び出していて近くにいる隆を掴もうとしているが届かない。隆はタバコの火を二本のダイナマイトの導火線に火をつけ廊下の奥に投げつけた！

隆「梨乃！伏せろ！」

とその時一体のゾンビの腕が隆の腕を掴んだ！

隆「くそ！離せ！」

隆は掴む腕を殴り引き離そうとするが一向に離す気配はなく諦めかけたその時一つの銃声が響くと隆を掴んでいた腕に当たり隆は開放された。

梨乃「隆さん急いで！」

隆は梨乃に向かって走り出し爆発音と共に作った壁に飛び込んだ。

その少し前一樹と正志は車の近くの壁を背に外にゾンビから身を隠していた。

正志「一樹さんそろそろ17:30ですね、やっぱり隆さんはもぉ

．．」

一樹「大丈夫だ！あいつは後からすぐに行くって言ったんだ、あいつはいつもはふざけているけど約束は破ったことないんだ。」

一樹は全ての銃に装弾を終わらせて携帯を見ていた。

兄貴「わかった病院に行くなら止めはしないが気をつけるよ。家の回りにゾンビ共は少ないからこっちは大丈夫だ。またなにかあったら連絡する。」

『兄貴へ。こっちは今警察署で銃を探しに来て収穫はあった。これから病院へ向かう。』

一樹「直美と信からメールがない、信はどこにいるかわからないからどうしようもないが直美は．．くそ！」

正志「一樹さんこのままじゃ真っ暗になっちゃいますよ急がないと

「一樹は携帯を握り締め空を見上げていた。」

「一樹「わかった正志の家族にも時間がないしな、車に乗れ行くぞ！」

二人が車に乗り込むと警察署の中からものすごい爆発音と共に建物の窓ガラスは割れ破片を跳び散らかせた！

正志「なっ何だ今の！？ガスに引火でもしたのか？」

「一樹「隆だ！あいつしかいない正志！行くぞ！」

「一樹は正面右側の入り口に走った。」

正志「えっ？ちよつと待つてくさいよ。」

入り口に着くと一樹はコルト・ガバメントのマガジン部分でガラスを割り鍵を開け中のバリケードを崩していった。

正志「一樹さんその先は危険ですよ！」

正志の言う事も聞かずバリケードを越した。ゾンビはほぼ全体が地下に下りていたがそれでも20〜30体は少なくともいる。だが一樹はゾンビに発砲しつつ接近して近くに寄るゾンビを片っ端から殴りけり、コルト・ガバメントが火を噴いた！自分の回りにゾンビがいなくなると地下に下りる階段に走り寄ったがその時またもや爆音が響き爆風で一樹とゾンビは一斉に吹き飛ばされた。

正志「何が起きてるんだ？」

「一樹は爆風で吹き飛ばされ壁に背中を激しく打ち付けていてすぐに起き上がれなく近くにいたゾンビが数体が一樹に近寄る。」

正志「一樹さん！逃げて！」

正志はゾンビに向かってコルト・ガバメントを発砲するが扱いに慣れていないせいか全く当たらなかった。

「一樹「邪魔するなあ〜！」

「一樹は近寄るゾンビに倒れたまま発砲し弾を撃ちつくすとコルト・ガバメントからマガジンを抜き予備のマガジンを出し装填させズボンからもう一丁コルト・ガバメントを出し瞬時に飛び起き周囲にいるゾンビ共の眉間を的確に捉えた。また一樹は階段に駆け寄り目下にいるゾンビ目掛けて発砲した！正志もやっ和一樹に追いつくと一

樹のコルト・ガバメントが弾切れになり二つ共マガジンを入れ替えると一丁はまたズボンに差し、正志の腰から木刀を引き抜き目下に飛び降りゾンビの頭部を叩きつけ、着地と同時にコルト・ガバメントを違うゾンビの頭を打ち抜いていた。

狭い階段に飛び降りた一樹に大勢のゾンビが逃げ場がないほど取り囲む。正志も上から援護をするが扱いが慣れていないため一樹に近いゾンビを狙えない。一樹は近くにいる奴から片っ端から撃ち続けていき少し間合いが出来ると目の前にいるゾンビ三体を同時に居合いで頭を叩き切った！

周りにいるゾンビを全て殲滅させると地下に向かって駆け下りた！と同時に何かが下から上がってきて一樹と衝突しそうになるが一樹は横に跳び、それに木刀を切りつける！が木刀はその鼻先で止まり一樹の眉間には銃口が向けられていた。

隆「お待たせダーリン。待たせちゃったかな？」

隆は銃口を下ろし笑いながら言い、一樹は隆を睨み。

一樹「遅えんだよ！暇だったからこいつらと遊んでたよ。」

そう言う二人は笑った。

梨乃「あの．．．急いで逃げないと一階にいるのが．．．」

隆「そうだ急げ！」

二人は一階に上がり銃を構えるとそこには微かに動いている奴はいるが20〜30体いたゾンビは全滅していた。

隆「どうなってんだ？」

隆が啞然と立ち尽くすしていると正志が近寄り言った。

正志「全部一樹さんがやつつけちゃいましたよ。」

隆が一樹に振り向こうとした時横を一樹が走り抜けた。

一樹「急げよ、外もこの調子だと結構集まってるぞ！」

一樹に続き正志が走り出し隆と梨乃もそれに続いた。右側玄関を出ると見えたのは車に数え切れないほどのゾンビが集まっていた。

一樹「あれじゃ走り出せねえ！」

隆「いいもんあるぞ。」

隆がバツクからダイナマイトを出した。

一樹「こんなもんどこで？」

隆「押収室に落ちてた。」

隆は導火線に火をつけ振りかぶった。

隆「どいてろ！隆アターツク！」

隆は思い切りダイナマイトを放り投げ道路の真ん中に投げつけた。

一樹「お前バツ・・・！」

正志「マジ！？」

梨乃「キャッ！」

四人は後ろに飛び退くと同時にダイナマイトは大爆発を起こし周囲一体を跡形もなく吹き飛ばした。

一樹「バツカ野郎！何考えてんだ！車まで吹っ飛んだらどうすんだよ！」

隆「まあまあほら見てみるよ。」

車は無事にそこにあつた。車の周りにいたゾンビ共は爆発の衝撃で息絶えたものや爆風で遙か先まで吹き飛ばされていた。

隆「ほら結果オーライってやつでしょ。」

一樹は呆れた顔をしていたが隆を見て手を差し出した。それを隆が握り返した。

一樹「全くこのバカは死んでも治らねえな。一遍死んでこい。」

隆「いやぁ中々死ねないもんだね、神様がまだ俺を死なせてくれないくてさあ。やっぱ世の中が俺を必要としてるって事かな。」

一樹「バカ言ってる。」

正志「でも本当に無事でよかった。」

梨乃「あの・・・折角の所申し訳ないんですけど急ぎませんか？」

隆「そおだった、早く行かねえと真っ暗になっちまうぞ。」

四人は車に乗り込み警察署を脱出し正志の家に急いだ。

7・救出

四人を乗せた車は隆の運転で道沿いの街灯が点きだしていた中を走っていた。車中では隆が先ほどまであったことを説明してた。

隆「んでダイナマイトで吹っ飛ばしてやってその後はひたすら撃ち進んで来たんだけど階段の近くまでは効いてなかったみたいで結構ゾンビがいたんだよ。突破は無理そうだったからまたダイナマイトの出番で、吹き飛ばした後一樹に会ったって訳。」

一樹「危うく俺まで巻き添え食らうとこだったじゃねえか！」

隆「まあそお怒るなって、そんな事より一階にいた奴等は本当に一樹一人でやったのか？」

正志「そおなんですよ一人でゾンビの群れに走って行っただと思っただ次の瞬間にはそこにいたゾンビ共を全員やつつけてまた次につて感じで凄かったんですよ！何度かやばい時もあつたんですけど木刀を手にしてからがまたすごいなのって。」

正志は初めておもちゃを買った子供のような顔で唾が飛ぶのも構わず説明した。

一樹「無我夢中でよく覚えてないんだけどな。」

隆「昔っからそおゆう事あるよなお前は。んでそんな時正志は何してたの？」

正志「いや、あの、一樹さんが危なくなつた時援護したんですがゾンビに全く当たらずで．．．すいません。あつそくだ一樹さんこれ落としたままだったんで拾っておきました。」

正志は一樹に空のマガジンを三つ一樹に渡した。

一樹「悪い、助かるよ。」

隆「まああやまる事ねえよ正志がいなかったら俺等だってここにいないんだからな。」

一樹「そおだ今回こおなつたのはこいつのせいなんだからな。」

一樹はそお言うつと運転席の後ろ側を軽く蹴った。

隆「だってよお、もし間に合わなかったらみんなやられちゃったかもしれないだろ？だからさあ……」

梨乃「すいません、私が悪いんです。私がいなければみなさんは危険な目にあわなかったのに……」

隆「梨乃、そんな事言うなよ。あの時はあれでよかったんだ、みんな無事だしそんな事思ってる奴なんかいないよ。」

一樹「いゝや不満大有りだね！」

正志「うん、その通りだね。」

二人は隆が運転席から伸ばした手を助手席に座る梨乃の肩に置いてフォロ―しているのを見て言った。

隆「お前等よくそんな酷い事言えるな！梨乃がどんな思いをしてきたかわかってんのか。」

一樹「その事に対してじゃあねえよ！その人がどんな辛い思いをしてきたのは見ればわかる。ただ一つだけ気に入らない事があるんだよ！」

隆「気に入らないってなんだよ？」

一樹「違和感なく梨乃って呼び捨てにしてることだよ！こっちは名前もなあんも知らねえのにさあ。」

隆はえっ？とゆう表情をして梨乃を横目で見て顔を赤らめた。

正志「さり気なく肩にまで触れていましたぜ親分。」

一樹と正志は細めた目で隆を見ながら言い、隆は慌てて自己紹介をした。

隆「えゝつとこちらは多古 梨乃さん^{たらの}24才で一樹と同じ今日が誕生日で、警察官で俺等とタメだ。」

梨乃「宜しく願います。あのさっきはすいません、お怪我ありませんか？」

後ろに振り向き会釈をしながら一樹に言った。

一樹「大丈夫だよ、ちよつとビックリしたけど防弾チョッキ着てたしね。それにどうせ死ぬなら君みたいに可愛い子に殺される方が幸せだしね。誕生日も同じだしなんか運命とかだったたりして。」

隆が軽く咳払いをして話しの間に割って入るように続けた。

隆「こいつがさっき話した岡村おかむらかずき 一樹それとこっちの青と白の囚人

服っぽい服着てるのが江田 正志えだまさし18才高三だ。」

正志「囚人は酷いですよおバイト中にこんなことあつて着替えるの忘れてたんですからあ。」

隆「ここにくるまでにずいぶん偉くなったもんだな最初はびびりまくって震えてたお子様だったのにな。」

さっきの仕返しと言わんばかりに正志をからかった。

正志「隆さんだって俺が危ない時ボロボロ泣いて正志死なないでくれゝって叫んでたじゃないですかあ。」

隆「そんな事言つてねえだろこのやる！」

正志「へへゝんだ、こっちこれもんならおいでゝだ。」

正志は隆に舌を出してからかつていて隆は後ろを振り向いて正志を睨んでペットボトルやタバコを投げつけていた。

一樹「前ちゃんを見ると、何かあつてからじゃ遅いんだぞ！正志もそのぐらいにしとけ。」

隆「うおっと！」

隆は正志とやりあつてると車は蛇行運転になつていたが一樹の一言で前を向き体勢を持ち直した。

一樹「全くこいつらはこんな時なのに緊張感つてもんがないよなあ。」

一樹が大きく溜息をついて言うとそれに笑っていた梨乃が言った。梨乃「でも良かったまたこうして笑えるなんて思つてもいなかったもの。隆さん、一樹さん、正志さん、本当に感謝してます。」

一樹「いいんだよ、人間一期一会だ。あと俺等はもう仲間だからこれからは助けられてもお礼を言う事なんてないよ。それと俺も梨乃つて呼んでいいかな？俺もさん付けじゃ落ち着かないしな。」

正志「自分だけ抜け駆けはないよお、ねえ梨乃ゝ。つてか俺ん時はそんな事言わなかったじゃないですかあ！じゃあ俺も今度から一樹つて呼ばお。」

正志が助手席に座る梨乃に近づきながら言った。

一樹「お前はダメだ。」

正志「えゝなんで俺だけダメなのお。」

一樹「男には先輩後輩とか上下関係つてのがあるんだよ。」

正志「そんなあゝ。」

一樹は正志に厳しい先輩風を吹かし、正志は残念そうに口を尖らせて落ち込んだ。

梨乃「正志君良いよ、梨乃って呼んでも。」

正志「マジ？いいの？」

梨乃「ねえいいでしょ？一樹。」

一樹「全くしよおがねえな。」

一樹は頭を軽く掻き笑いながら言った。

隆「なあんか俺だけ仲間外れにしてない？どこ行くのも運転手つて損だよなあ。」

梨乃「そんな事ないよ。隆には一番感謝してるのよ。」

隆「おつ．．．おい正志、道はまだまつすぐか？」

隆は恥ずかしさを隠すため前を向いたまま正志に言った。

正志「そおですねまだまつすぐ行つて下さい。そうすると左側にガソリンスタンドがあるんでそこを右に曲がってください。」

隆「了解！」

四人を乗せた車は目的地に向かい走っていた。日は大分落ちあと少しで夜になるうとしていた。現在18：40

正志「次を左に行つたら右側に見えるんですが。どうしましょう比較的裏道なので奴等は少ないですけど、どうやって家に入りましよう。」

一樹「バリケード作られてても何とか入り込めるだろう、二階とかから。」

正志「そお．．．ですよね。」

一樹「なんか言いたそうだな？なんかマズイ事でもあるのか？」

隆「左曲がつたぞ。そろそろか？」

正志「左に見えるのが僕の家です。」

隆「左って壁しか見えねえぞ？」

正志「それウチの塀です。」

隆「えっ！？結構先まで続いてるぞこの塀。」

その塀は長くおよそ100m以上はあり高さは4mをはあつた。

正志「多分正面玄関も、裏口も開かないと思うんで塀を乗り越えるしかないんですけど、どうしましょう。」

隆は驚きを隠せないのか黙っていた。

正志「一応裏口行つて見ますか？」

車は裏口に着き車を停めると一樹が飛び出し近くにいたゾンビを木刀で頭を叩きつけ絶命させた。

一樹「よし、いいだろうここにはもういないみたいだ。」

一樹は辺りを見渡すと合図を送り車からみんなが降りてきた。

正志「やっぱり開いてない。どおしよう。」

一樹「この扉はどうやって鍵かけてるんだ？」

正志「ここの鍵は裏から門をかけてあるだけなので中に入れば簡単に開けるんですけど。」

一樹「わかった。」

一樹は急に車に向かって走り出しそのまま車の屋根まで駆け上がるとそのまま塀に一步、二歩、三歩とかけあがり意とも簡単に4mはあるだろう塀によじ登り中が安全なのを確認すると向こう側へと消えた。

その時ゴトゴトと音が鳴りその後ゆっくりと裏口が開き一樹が手招きをしていた。

隆「今更だがあいつ本当に人間離れしてるよなあ。」

正志「僕だつてもうこんな事じゃ驚きませんよ。」

唯一始めてみた梨乃は目を丸くし一樹が駆け上がり越えていった場所と裏口にいる一樹を交互に見ていた。

隆「梨乃！入るぞ。」

梨乃「はっ、はい。」

四人は正志の家に入るとまた同じように裏口を閉め奥に進んだ。

隆「こりやすつげゝ広いな！道場つて儲かるんだなあ。」

正志「僕は経営は良く分らないんですが結構代々伝わってきている土地らしいですよ。でも父が倒れてからは門下生が少なくなってしまうたので、経営やばいのかな？」

正志は軽く苦笑いをして母屋に向かい歩いていった。

一樹「親父さんは病気が何かで？」

正志「それが分らないんです、去年から体調を崩し始めどこの病院へ行こうが原因が分らないの一言でした。」

一樹「そうか、余計な事を聞いて悪かった。」

正志「いいんです気にしないでください。あっ見えました、あそこです。」

正志が指差すところに辿り着いたそこには一般家庭の4個分ぐらいの二階建てで瓦屋根の母屋が建っていた。

一樹「やつぱりぜんぶ鍵が閉まっててバリケードをしてるみたいだな。正志なんとかならないか？」

正志「ちよつと呼んでみますね、おゝい！母さゝん！莉奈ゝん！」

正志は何度か呼んでみるが何も反応を示さなかった。

正志「あれ？おかしいな？必ずあそこに誰かしらいるんだけどなあ。」

隆「まさか思いたくないがもう・・・。」

正志「そんな事ないですよ！どこか違う部屋にいるんですって、きつと・・・。」

すると窓から何かがこちらを隠れながら覗く物がいた。

女の子「やつぱお兄ちゃんだ！お母さゝん、お兄ちゃんが帰ってきたよ。」

それは正志の妹であつた。

正志「莉奈！良かった無事か？」

莉奈「うんみんな大丈夫だよ。今お母さんが鍵開けに下りたよ。」

少しして中に明かりが付き玄関のバリケードを崩しているのかが

ラガラと激しい音を鳴らし玄関は開きそこには純和風な感じの和服を着た女性がいた。

正志の母「正志・・・」

正志の母は駆け寄って正志に抱きつくと言を零し力強く抱きしめた。

正志「ちよつ母さん痛いって、ほらみんなも見てるし。」

正志の母はゆっくり正志から離れるとみんなの存在を知り急いで涙を拭い顔を赤くしていた。

正志の母「私ったらみなさんの前でなんて事を。」

一樹「いいんですよ、親が子を思う気持ちは当たり前前の事なんですから。良かったら中に入っても？」

正志の母「ありがとうございます。どうぞお入りください、みなさんの事を主人もお待ちしていますから。」

正志「父さんが？まあみんな上がってください。」

3人は家に入るとその広さに圧倒された。敷居を跨ぐとそこには古いのではなく赴きがありこんな時でも清掃も行き届いていた。

隆「玄関が普通の家と変わらない広さだぞこりゃ。」

梨乃「でも正志君おぼっちゃまには見えないわよね。」

隆「最近の高校生なんてあんなもんだよ、髪染めてピアスなんてしてない方がおかしいくらいじゃないか。」

梨乃「やっぱそおなんだねえ、補導される子もそんな感じの子多いからなんか複雑。」

一樹「今の世の中真面目な奴の方が殺人をしたりしてるから一概には何とも言えないがな。」

階段を上がり廊下を進み一樹が正志の母に聞こえないように言った。一樹「中にいる噛まれた奴が少しでも怪しい行動を取ったら躊躇するなよ！」

隆「わかった。」

正志「はい。」

正志の母「みなさんここです、中に入ってくつろいでいて下さい、

今お風呂の支度とお茶をお持ちしますの。」

一樹「お構いなく。」

三人は部屋に入るとそこには先程窓から覗いていた女の子が立っていた。

莉奈「お兄ちゃんおかえりい。」

急に抱きつく正志はその勢いで隆を巻き込み倒れてしまった。

正志「痛え、コラ莉奈！早くどけ！」

莉奈「やだよおだ！すごい心配したんだからね。」

莉奈は短いスカートを履いていたが仰向けに倒れる正志の上にまたがっていた。

隆「痛たたた、コラコラじゃれるなら向こうでやってきなさいお嬢ちゃん。パンツも見えてんぞ。」

莉奈「大丈夫だよおじさん、別に見られたって減るもんじゃないしね。」

隆「おじさん！？」

隆は腰を抑えながら立ち上がり一樹を見てがっくりと肩を落とした。

正志「バカ！お前隆さんに何て事言うんだよ。」

一樹「莉奈ちゃんだっけ？申し訳ないんだがおじさん達お兄ちゃんに話があるから離してもらえないかな。」

すると一樹を見た莉奈は急にスカートを抑えて立ち上がった。

莉奈「始めまして、江田 えだりな 莉奈です。16歳高一です。彼氏はいません。お兄さんは彼女ますか？」

一樹「いないけど。」

莉奈「じゃあ私と付き合ってください。」

四人は口を開けたまま呆然としてしまった。

正志「お前さつきからなんなんだよ！みんなに失礼だろ！」

莉奈「なんかビビッってきちゃったんだもん。」

正志「ビビッじゃねえよ全くみなさんすいませんこんな妹で。」

梨乃「いいんじゃない、素直ないい子で。」

隆「一樹はお兄さんで、俺はおじさん．．．」

唯一隆だけ落ち込んでいた。

五人はテーブルを前に座り休むことにした。莉奈は一樹の隣に座り異様なまでにくっついていた。

正志「こちらが一樹さんで、こちらが隆さんで、こちらの女性が梨乃さんだ。失礼がないようにしろよ。」

莉奈「一樹さんって言うんだ。みなさん莉奈です、よろしくお願ひします。おじさん達とお兄ちゃんってどおやって知り合ったの？」

隆「またおじさんって．．．」

梨乃「私だってあの子からしたらおばさんだから気にしないの。」

莉奈「警察官のお姉さん、梨乃さんでしたっけ？おじさんと付き合ってるの？」

梨乃「えっ？付き合ってないわよ、それがどうしたの？」

莉奈「もし付き合ってたら梨乃お姉さんとおじさんとじゃ釣り合わないなあって思ってる。」

隆は尚も余計に落ち込んだ。

隆「やっぱ俺だけおじさん．．．生まれてこなきゃ良かった．．．」

梨乃「そんな事ないよ隆、ほら元気出してっつてよしよし。」

梨乃は隆の頭を子供のように撫で元気付けていた。

正志「莉奈！お前さっきから隆さんに恨みでもあるのか？」

莉奈「別に、普通だよお。」

一樹「さてそんな事より莉奈ちゃんに聞きたいことがあるんだが。」

莉奈「そんな、莉奈って呼んでください。」

一樹「じゃあ莉奈に聞きたい事があるんだけどいいかな？」

莉奈「何でも聞いてください。」

一樹「まずお父さんはどこに？」

莉奈「具合が悪いので隣の部屋で横になってます。」

一樹「そうか、あと怪我をした人がいるみたいだがその人はどこに？となりか？」

莉奈「なんか具合悪くなったからって横になつてくるって言つてました。」

一樹「わかったありがとう、梨乃はここに莉奈と待っていてくれ。」

梨乃「わかった、気をつけて。」

一樹「隆！顔上げろ！行くぞ。正志、隣の部屋に行くぞ、案内頼む。」

正志「わかりました、行きましょう。」

莉奈「何？私も一樹さんと行く〜！」

一樹達に着いて行こうとする莉奈を力ずくで梨乃を抑えた。

梨乃「女は黙って男の言う事を聞くものよ。まあ時と場合によるけどね。」

三人は部屋を出て手にはコルト・ガバメントを手に隣の部屋に向かった。

8・休息

三人は隣の部屋に着いた。

正志「ここです。」

隆「もしかすると手遅れの可能性もあるぞ。」

正志「覚悟してます。」

一樹「入るぞ。」

部屋に入ると中は真っ暗で何も見えない、正志が照明のスイッチに手がかり明かりをつけた。その奥では一人の男性が寝ていた。

*「誰だ？」

正志「父さん!？」

正志の父「正志か？」

正志「うん。」

正志の父「そうか無事にここまでこれたんだな。後ろのお二人のお陰らしいな。」

正志の父は後ろに立つ二人を見て言った。

一樹「岡村 おかむらかずき 一樹です。」

隆「板垣 いたがきたかし 隆です。」

正志の父「正志の父です。お二人には色々正志を助けていただいたみたいでなんとお礼を言ったらいいのか・・・して一樹君って言うたかな？たしか居合いができると聞いたが？」

正志「父さんなんで知ってるの？」

正志の父「莉奈の電話にお前から連絡があつたことを一部始終聞いたよ。」

正志「そおなんだ僕の壱ノ型 いちのかんせ 一閃を見ただけで使ったんだよ、僕よりも完璧にね。」

正志の父「なるほど、この正志が言うんだから間違いないだろうな。見ただけで出来るとは何かをしてらっしゃったのかな？」

一樹「いえ何も、二人とも持ち上げすぎですよ。たまたま出来ただ

けでまぐれですよ。」

正志の父「いや、まぐれで出来るような技ではないんですよ。足の運び、右肩、右肘、右手首、右掌、そして抜刀の速度、どれかひとつが欠けても木刀では普通の打撃となんら変わらんからな。一つだけ言うなら君は天性のものを持っているとゆうことだ。どうだねウチの入門しないかね？悪いようにはしないぞ。」

一樹「そんな大袈裟なあ俺はどこにでもいる一般人ですよ。あとのおも習い事とかが苦手なんですよね。」

隆「もったいねえなここまで言ってくれてんのに。」

正志「そおですよ、約束したじゃないですか！僕と一緒にやってくれるって言ってたじゃないですか。」

一樹「俺は考えとくつて言っ・・・。」

その時階下からガシャーンと何かが割れる音と悲鳴が聞こえた。

一樹「ちつ、忘れてた。急がねえと。」

一樹は悲鳴が聞こえた方へと走り出し、隆と正志も後を追うが正志は呼び止められた。

正志の父「正志、これから何かあった時は一樹君に付いていきなさい、あの子の目には何か秘められた物が見える。」

正志「ああわかつてる。」

正志は振り向き二人が向かった先へ急いだ。一樹は一足早く悲鳴が聞こえた所に着くとそこは台所だったがいるはずの正志の母親がいない。すぐ後ろから隆と正志がやってきた。

隆「正志の母ちゃんは？」

一樹「分からない、一体どこに？」

その時台所の隣の部屋から物音が聞こえ一樹はそこを見るとドアが少し開いているのが見えた。

一樹「そこか？」

一樹はドアを開けると目の前には人であったものが口から血が混じったよだれを垂らし一樹の喉元に噛み付いてきたが、一樹は腕でそれを受けると横に倒し手に持っていたコルト・ガバメントで頭を

吹き飛ばした。

隆「一樹大丈夫か？」

一樹「なんとかな。それよりおふくろさんは？」

三人はその部屋を探すと押入れの中に身を小さくして震えていたのを見つけた。

正志「母さんもお平気だから。もお心配要らないから僕が付いてるから。」

正志はそう言うと言と母親を強く抱きしめた。

隆「やっぱ親子っていいもんだな。なあ一樹。」

一樹「ああそおだな。大丈夫みたいだから俺は先に戻ってるぞ。念のため隆は付いててやってくれ。あと親父さんと莉奈にはできるなら内緒で。」

隆「わかった。」

そこを後にした一樹は途中にあったトイレに入り左腕の袖を捲った。

一樹「限られた時間はもおないか。」

なんと一樹は先程の奮闘でゾンビに腕を噛まれていた。手に巻いていた布を傷口に巻き止血し部屋に戻った。この時19:10

莉奈「あつさつきなんかでつかい音が聞こえたけど何かあったの？」

一樹「何も無いよおふくろさんがお皿を割っちゃったみたいだね。」

梨乃「どうだった？大丈夫だった？」

一樹「ああ、おふくろさん怪我もないし大丈夫だよ。お皿は手遅れだったから片付けてきたよ。」

梨乃「そお...」

一樹は椅子に座ると目の前に灰皿が目に入り莉奈に聞いた。

一樹「タバコ吸ってもいいかな？」

莉奈「どうぞ、うちではお父さんしか吸わないけど今はあんな状態だから吸わないけどね。」

それを聞くと一樹は懷からタバコを出し深く吸って気を落ち着か

せていた。少しして隆と正志は母親を連れてお茶を持って上がった。
きた。

正志「こんなものしかないですけど良かったらどうぞ。」

テールにはお茶と煎餅が出された。

梨乃「ありがとうございます。じゃあお言葉に甘えて。」

梨乃はお茶を手に取り啜った。

一樹「おふくろさん、お気使いありがとうございます。大丈夫ですか？」

正志の母「大丈夫です私には護らなくちゃいけない人もいるし、正志も付いていますから。」

一樹「そうですか、なら良かった。」

正志の母「そうだなおなか空いているでしょう？お風呂の支度をしたので良かったら入ってください。みなさん大分汚れてるみたいだし。」

笑いながら正志の母は言ったが四人は改めて見るとお世辞にも綺麗な格好はしていない、血と汗で汚れ所々が破れていた。体も擦り傷や打撲数え切れない傷を負いつつも良くここまで無事に来れたものだ。

一樹「何から何まで本当にありがとうございます。では遠慮なく頂きます。梨乃、先にお風呂頂いてくるといいよ。」

梨乃「みんなの方が疲れてるだろうし、私は最後でいいよ。」

隆「レディーファーストだよ。」

莉奈「私も梨乃お姉ちゃんと一緒に入る。」

正志「バカ！そんな羨ましい・・・じゃない迷惑だろ！」

梨乃「私は迷惑じゃないよ、じゃあ一緒に入ろうか莉奈ちゃん。」

莉奈「やったね。」

二人は浴室に向かった。

一樹「実は話しておきたい事がある。」

一樹は持ってきた拳銃などの手入れをしながら話した。

一樹「考えたんだが梨乃はここに残ってもらおうかと思う。ここな

らあの高い塀だゾンビ共は絶対に入って来れないしここなら比較的
辺りにもゾンビは少ないしな。」

正志「そうですね、病院には今まで以上のゾンビがいるかもしれない
ですしね。」

一樹「・・・違う、正志お前も残るんだ。お前はここにいてみんな
を護っていてくれ。頼む。」

隆「そうゆう事、大体お前の事に食わなかったしまあいただけ少
しは役に立ったけどな。だからこの先には関係のないお前はいらな
いって事だよ。」

一樹「まあそおゆう事になるかな。」

正志「そんな事言ったって無理ですよ！あなた達にはどれだけ助け
られたと思ってるんですか！ここにだって僕一人じゃ来れなかった
しさっきだって僕じゃ母さんを護れなかったかもしれない。だから
少しでも二人の力になりたいんですよ。」

正志は二人がワザワザ危険な所に連れて行きたくない気持ちを察
し何があっても付いて行くと行って聞かなかった。

一樹「だからな正志、俺等は別に帰ってこないつもりじゃないんだ。
直美を連れて必ず帰ってくる。」

正志「絶対に嫌だ！」

その時後ろのドアが開き正志の父親が入ってきた。

正志の母「お父さん歩いてても大丈夫なんですか？」

正志の父「この子達は必死にがんばってここまで来てくれて私達を
護ってくれた。今後の事まで話しているのに寝てられる訳ないだろ
う。」

正志の父は椅子に座り一樹と隆に言った。

正志の父「申し訳ないが隣で話しが聞こえてしまつてな。一樹君、
隆君、どうかこの子も連れて行ってあげてはもらえないだろうか？
この子は気が優しく引つ込み思案な所があつたが今朝から数時間会
わないだけでこんなにも男の顔になって帰ってきた。だから足手ま
とい承知でお願いしたいんだ。どうかこの子を宜しくお願いします。」

「
正志の母「お父さん．．．」

正志「父さん．．．」

隆「そこまで言われちゃあなあ、わかりました、任せてください正志は責任を持って連れて帰ってくるので安心してください。」

一樹「親父さん、正志は俺等に会わなくてもこいつは一人前の男ですよ。俺も隆も正志がいなければここに辿り着くのは無理だった。

親父さん、正直正志を無事に帰す事は約束できません、それでもいいんですか？」

正志の父「それは正志が一番良くわかってるだろう。代々江田家の男は頑固らしくてな。二人ともこの子を頼みます。」

一樹「わかりました。親父さん顔を上げてください。正志！今日はもう外は暗くて危険だから出発は明日だ。ちゃんと朝起きねえと置いてくからな！」

正志「はい！．．．ありがとうございます。」

正志の父「礼を言うなら二人に言いなさい。正志良い顔になったなあとの娘さんのことなら心配しなくても本人がちゃんとわかってるだろう。」

一樹「えっ？」

正志の父「さつき君達が下に下りていった時に娘と話していたのが聞こえたんだよ、君達とは一緒に行きたいが足を引く張るだけになるとな。だからここに一緒に残っていいかと話していたよ。あの子もまた強く生きてきたんだな。」

隆「梨乃．．．」

その頃風呂場では。

梨乃「莉奈ちゃん16才だったよねえ？」

莉奈「そおけどどおしたの？」

梨乃「何でそんなに胸が大きいのか？食事？生活？何の違い？私なんて全然ないから．．．」

莉奈の胸を見た後自分の胸を見て溜息をつく。

莉奈「そんな事ないよ大きいと肩こるし男子には変な目で見られるし電車やバスに乗ればかなりの確立で痴漢に遭うしね。でも小さい方が感度が良いって言うよね。」

莉奈は急に梨乃の胸を後ろから揉みはじめた。

梨乃「ちよつ莉奈ちゃん止めてって．．．あつ．．．んっ．．．」

莉奈「超敏感くかわいい。」

梨乃は莉奈を振りほどくと手元に置いてあつた桶で莉奈の頭を叩いた。

梨乃「いいかげんにしなさい。」

莉奈「ごめんなさあゝい。」

頭を抑えて半ベソをかいていた。

梨乃「高校生の癖になんでそんな事知ってるのよ全く、しかも上手いし。」

莉奈「えゝそんな事ないよお今時みんなこんな感じだよお。」

梨乃「まさか初体験はまだ．．．だよね。」

莉奈「中二の終わりに教育実習で来てた人と放課後学校でしたよ。」

梨乃「中二？14才？教育実習生と？学校？世も末だわ．．．って不順異性交遊じゃないその教育実習生も署で取り調べる必要があるわね。」

莉奈「ちよつとまってよ昔のことだし時効でしょ！それよりも梨乃お姉ちゃんはお彼氏とかいないの？まさか処女だったりする？」

梨乃「処女ではありません。彼氏はいないけど．．．」

莉奈「けど．．．」

梨乃「気になる人はいる。」

莉奈「わかったおじさんでしょ？」

梨乃「うん．．．でもなんか好きってゆうかなんか一緒にいたい人。」

莉奈「良かった、おじさんで。一樹さんだったらどうしようかと思つたよお。」

梨乃「怒らないで聞いてね、でももしかすると私一樹の事が好きかもしれないの。」

莉奈「だって今おじさんだって言ってなかった。」

梨乃「それとはまた違う気持ち、なんか何かをしても目で一樹を探してる自分があるんだ。なんか不思議な人だよねふざけてたと思ったら急に真面目になったり、目がねなんか見てると深いってゆうか一樹を見れば見るほど魅かれていくの。」

莉奈「わかったよ、梨乃お姉ちゃんは今から私のライバルね。負けないから。」

梨乃「わかった。お手柔らかに。さてそろそろ出ましようかみんなが待ってるしね。」

梨乃は少し大きな目の洋服を借りて着替え、二人はみんなのいる部屋に向かった。

正志の母「こんなものくらいしか出来ないしお口に合うかどうか分からないけど良かったら、召し上がって。」

煮物や揚げ物多彩な料理がテーブルいっぱい運ばれた。

正志「母さんいくらなんでも多くない？」

正志の母「あら若いんだからこのくらい大丈夫よお。」

丁度風呂から上がった梨乃と莉奈がやってきた。

莉奈「莉奈お腹ペッコペコ、あっ！いただき。」

莉奈はテーブルに出されていた唐揚げを摘んで一口で食べたが母

親に手を叩かれ怒られた。

正志の母「こら！御行儀悪い。お客さんが来てるんですからね。」

莉奈「ごめんなさあ。」

梨乃「おば様手伝います。」

正志の母「いいのよもう終わりだから、座ってて。」

梨乃「じゃあお言葉に甘えさせていただきます。」

正志「じゃあみんなも揃ったしいただきましようか。」

隆「旨そお！いっただきまあす！」

他「いただきます。」

みんなは料理に箸をつけ口に運んだ。

隆「旨い！おふくろさんこれならいくらでも食べれますよ。」

一樹「うん、美味しい。これがおふくろの味ってやつだな。」

正志の母「あら、嬉しい。おだててもこれ以上は何も出ないわよ。」

お茶を入れ笑いながら言うと言みんなに差し出した。

梨乃「お世辞じゃないですよ本当に美味しい。」

隆「そおそお嘘じゃないですよ、俺、暖かいつてゆうかなんてゆうかこんな旨いご飯一樹の家でぐらいしか今まで食べた事ないからさあ。」

正志の母「お母さんの料理は？」

一樹「！？」

隆「俺母親知らないんです、父親も。物覚え付いた頃にはもう施設にいて．．まあそんな事より冷めちゃうから食べましようよ。」

莉奈「えゝ気になるう。」

正志「バカ！そんな事いいんだよお前は黙って食べてろ！」

莉奈「はあゝい。」

少し静かな時間が流れ隆が話し始めた。

隆「なんか空気悪くしちゃったね、じゃあ少し昔の話でもしようか。いいよな一樹？」

一樹「お前がいいならいいんじゃないか。」

隆「わかった。莉奈ちゃんおじさんの昔話聞かせてあげるよ。一樹も出てくるし興味ある？」

莉奈「うん、聞きたい！」

隆が一樹を見ると食べるのを止めテーブルの上で手を組み話し始めた。

隆「ほらよくそうゆう所って園長先生が良い人で父親や母親の変わりってTVとかだと言うけど実際はそんなもんじゃなかった。飯はいつもと変わらず冷たくて旨いなんて一度も思ったことなかった。料理をこぼしたりしたら頭を何度か叩かれて物置に閉じ込められて

一日何も食べさせてもらえないなんて当たり前で、洋服を汚したら一日裸でいさせられるんだ。そうすると子供ってどうなると思う？みんな自分の机から動かなくなってる誰とも話さなくなるんだよ。」

莉奈「みんな可哀相。」

隆「そおだねでもやっぱり小さい子供だと何もできないし行くところもないから黙って従うしかなかったんだよ。でも、毎日人形みたいな暮らして俺は我慢できなかった。それで中学になったと同時に施設飛び出したんだ。新聞屋に頭下げて住み込みで働いかせてもらったんだけど、やっぱりどこ行っても施設出だと後ろ指差され変な目で見られた。やっぱりガキだったからかグレたってゆうのかな？悪いことばっかして中三になると俺の事を学校で誰も何も言わなくなってる回りにも仲間がいっぱい出来てた。」

9 ・過去（前書き）

読んで頂いている皆様へ。

今回から少しの間だけ昔の話になってしまいますがこれからも宜しくお願いいたします。

9・過去

時は遡り十年前・・・

隆が通っていた中学の一つの教室に、一人の生徒が走っていた。机の上に座ってる長ラン、ドカンまあ昔でいえばオーソックスな不良の服装に身を包んだ生徒に駆け寄って言った。

「板垣君、四中の奴等が明日、橋の所の土手に三時に仲間を連れて来いだって！どうしよう向こうはわかるだけで40～50人は集まるよ。こっちは集めても20人ぐらいしか・・・」

結構な距離を走ってきたのか息を絶え絶えで話す生徒の腹に隆は蹴りを入れ悶絶させた。

「うるせえ！やってやろうじゃねえか1人で2、3人ぶっ飛ばせば事足りるじゃねえか。全員に遅れたり逃げた奴は殺す！って伝えておけ！」

隆は腹を押さえてうずくまっている生徒に怒鳴ると生徒は返事をして、よろめきながらも走っていった。

「たくつ、使えねえ。」

隆は見下した目でその後姿を見ていた。

翌日・・・校舎の屋上に大勢が集まっていた。

「板垣の野郎二年で学校シめたからっていい気になりすぎだよな！」

一人の生徒がタバコを吹かしながら他の生徒に話していた。

「昨日なんて橋の所の土手に三時だって伝えただけで蹴り食らったんだぜ！あいつ調子に乗りすぎじゃねえか？一遍やった方がいいんじゃないねえの？」

その生徒は昨日隆に伝言をした生徒で話しながら胸の前で片方の手を握り拳を作りもう一方の手でそれを力強く握っていた。

それを見て一人の生徒が言った。

「誰がやんだよ、俺は10人いてもあいつとやんのは嫌だぞ！喧嘩だけはあいつ負け知らずだからな。」

一同がそれに対して言葉なく黙っていた。

「なあ良い事思いついたんだけど。明日バツくれちまわねえか？」

一人の生徒がそこにいる生徒を見回しながら言った。

「それが出来りや苦労してねえだろ！俺等だつて面子だつてあんだぞ！」

その生徒に一人が言うとも一緒に呆れた顔をしていた。

「まあ聞けよ、板垣の野郎の事だから何人いても四中の奴等に突っ込んでくのは確実だろ？そしたら当分病院から出てこれねえ。」

「だからそれじゃ俺等の面子が立たねえって言つてんだよ。」

提案を出した生徒にまたしても却下を言い渡すが一人の生徒は言うのをやめなかった。

「それでよそのままだとあいつらに最悪傘下つか手下になつちまうだろ？そんなんじやこの辺りも安心して出歩けねえ。だから板垣がやられた後、あいつにはついていけないから他の中学シめるのに手を組まないかってな。三中は兵隊だつて多いから四中には願つたり叶つたりだろ。」

一同が真剣に話を聞きそれに賛同するかのように違う生徒が言った。

「そおだなそれなら俺等負けた事になんねえし他の中学シめれば最悪でもNO・2だぜ。」

立ち上がり他の生徒の士気を上げた。

「でも下手すりや板垣死んじまつたりして。」

一人の生徒が心配そうに提案者に言った。

「いいんじやねえの死んだつて、どおせあいつ施設出だから誰も悲しむ奴なんていねえからな。」

提案者は笑いながらその生徒に言う全員で馬鹿笑いしていると、その集団の後ろに普通の学生服で規則正しい髪型の生徒が立っていた。

「何だてめえ何見てんだよ、殺されてえのかよ！」

一人の生徒が真面目な生徒に近寄り襟首を掴むと真面目な生徒は笑っていた。

「やだねえ面子とか言つてて一番かつこ悪い方法選ぶんだ、不良は面子が大事なんじゃないの？」

真面目な生徒は臆する事無く不良全員に聞こえるように言った。

「くそガキ！」

襟首を掴んでいた生徒は空いている手で真面目な生徒を殴りつけた！だがその拳は空を切つて掴まれていた生徒はいつのまにか殴りかかっていた生徒の後ろを歩き集団に向かって歩いていった。

「いつの時代だか知らないけど鳥の巣みたいな頭してかつこ悪いもないか、どおせそこに行かないなら行けない理由俺が作つてあげるよ。」

集団の目の前まで歩いていくと手前にいた一人の顎先に目にも止まらぬ速さで殴りつけると生徒はそこに崩れ落ちた。

「殺す！てめえらやつちまえ！」

提案者が全員（一人を抜かして）を仕切り真面目な生徒を逃がさないように後ろに回り近くにいる奴から殴りかかった！

「ちよっ笑わすなよ、時代劇かと思つて桜吹雪か印籠出す所だっただろ！」

真面目な生徒は殴りつけてくるのを軽々とかわすとカウンターで次々に生徒達を倒していった。次第に何人かはそこから逃げたが残った奴等は真面目な生徒に悉くと返り討ちにあつた。

「さあて逃げちまつた奴等は置いといてお前だけは許せねえからなあ。」

真面目な生徒は提案者に言った。周りには逃げた生徒を引いても10人近くが足元に倒れていた。

「あれだけいた奴等が・・・てめえ誰なんだよ！まっまさか四中の！？」

提案者は驚きを隠せなく足元は震え真面目な生徒を指差し言った。

「アホ！態々お前等のタメに四中がこんな事する訳ねえだろ。」

真面目な生徒は呆れた顔で言った。

「じゃあ誰なんだよ一体！？俺達に何の恨みがあってこんな事すんだよ！」

少しずつ近づく真面目な生徒から逃げるように後退りしながら言っ

った。
「二組の岡村　一樹だ、成績はまあいいかな、部活はやってなくて

趣味は特にナシ。あと学校じゃ目立たないのはお前等が目立ちすぎ！
ってかお前等弱すぎるだろこれじゃ行かなくて正解。」

一樹は冗談交じりに話すと提案者は落下防止の金網が背中当た
り身構えた。

「二組の岡村？そいつがなんで俺達を！」

そう言つと提案者は一樹に走りながら殴りつけたが一瞬早く一樹
の拳が提案者の顔面にめり込み倒れた。

「人には触れちゃいけないってもんがあんだろ、それにお前は触れ
た・・・それだけの理由だよ。って聞いてねえか、少しやりすぎた
かな。」

一樹は提案者に言うが聞いていないのが分かると辺りを見回し頭
を掻きながら言つてその場を後にした。

その少し後・・・

「四中の奴等全員殺してやる！」

隆は土手に近づくとそこには40～50人以上がまちかまえてい
た。

「くそ！かなりいやがるな、んっ？あいつら何処に隠れてんだここ
にもいねえぞ。」

辺りを見回すが何処にも仲間は見当たらなかった。

「あいつら逃げやがったな！・・・さすがに死んだな。」

隆はタバコを出し火をつけるとその集団に向かって行こうとして

いた。

「板垣、どこいくんだよ。」

単車に乗って一樹が隆の目の前に現れた。

「誰だてめえ！」

「なんだよ同じクラスの顔も覚えてないのかよ、岡村 一樹だよ。
俺は知っててお前は知らないのなんか不公平じゃない？」

一樹は単車のエンジンを切ると隆に言った。

「そいつが何の用だ、目障りだ消えろ！」

隆は一樹を相手にしないで橋の下にいる集団に目をやった。

「仲間来ないけど一人で行く気か？」

隆の肩に手をかけて言った。

「てめえには関係ねえだろ！．．．なんであいつらがこないの知って．．．」

手を振り払いながら言うで一樹の顔を見て隆は驚いた顔をしながら言った。

「だって俺がここに来れない様にぶっ飛ばしてきた。」

一樹は片目を瞑って親指を立てた手を前に出した。

「てめえ何やったかわかってんのか！」

隆は一樹の頬を殴りつけて倒れる一樹に言った。

「痛いゝ、あいつならいてもいなくても変わんねえし気に食わねえからやった、それ以外に理由なんてあるかよ。」

殴られて口元が切れたのか口端から血が出ているのを親指で拭いながら言った。

「この落とし前どおつけるつもりだ！？」

隆が一樹に掴みかかり怒鳴った。

「だからこの喧嘩俺が貰ってやるよ、だから板垣は家に帰ってチンと遊んできな。」

掴まれていた手を振り払い立ち上がり汚れた服を手で叩きながら隆に言いその集団を見ていた。

「ふざけんな！お前あの人数だぞ一人で勝てるわけねえだろ！」

またも一樹に掴みかかると自分の顔を一樹の顔に接近させて言い放った。

「でもお前だって一人で行こうとしてただろ？」

近づいていた隆の目を見ながら一樹は静かに言う。隆は掴んでいた手を話し一樹に背を向けて黙っていた。

「本当はお前が逃げ出すのを見に来ただけど一人であれに向かうとしたら？だから気が変わった。それに連中がこなかったのは俺にも責任があるからな。」

一樹は単車に跨るとエンジンを再びかけ何度かアクセルを回した。
「お前・・・何するつもりだ？」

「誤解してたよ、大勢いなきや何も出来ないと思ったけど、お前は違かったよ。また会えたら謝ってやるよ。」

そう言う隆の問いにも答えず単車に乗ったまま土手を猛スピードで駆け下り集団に向かって走っていき近くまで行くと単車を飛び降り無人の単車は集団に突っ込み1/3を動けなくした。

「あいつ無茶苦茶しやがる！」

隆はそれを見て言う。土手を駆け下りた。

「うらあ！一人で何もできねえ奴等が俺に勝てるわけねえんだよ！」

一樹は不意を付かれたのか驚きを隠せず混乱している集団に殴りかかっていった。

「なんだこいつは！？やれえこいつを生かして帰すなあ！」

一樹は周囲にいた奴等を瞬時に動けなくしていた。が後ろから鉄パイプで殴られてしまい倒れこんでしまった。

「今だ！このふざけた野郎を殺せ！」

倒れた一樹に蹴りや鉄パイプなどが容赦なく襲い掛かる。
「ぐっ・・・が・・・くそさすがに無理か。」

その時、取り囲む連中を殴り飛ばし一樹の所にやってきて一樹の腕を掴み起き上がらせた。

「てめえ無茶にも程があんぞ！」

隆が一樹の腕を掴んだまま怒鳴った。

「来るの遅いつつーの！俺痛い嫌いなんだから頼むよ。」

怒っている隆に一樹はふざけて言う。隆は笑っていた。

「こいつ板垣 隆だ！こいつには油断するなよ！」

「あれ？もしかして有名人なん？ってか俺は？」

隆を指差しながら言うが誰にも相手にされなかった。

「おい、お前どのくらいやれるんだよ？やるからには勝算あったんだろ？」

隆が取り囲む奴等に警戒しつつ言った。

「あるよ。」

「どうすればいい？」

背中を一樹に合わせ目の前の奴等を威嚇しながら言った。

「このまま背中合わせに目の前にいる奴等を倒す！そうすりゃいつかは目の前の奴等はいないって戦法。」

胸を張って威張りながら話した。

「てめえ等なにくつちゃべってんだよ！！」

一人が鉄パイプで殴りかかると隆はギリギリで見切り顎に下から突き上げた拳が打ち貫かれる。

「お前漫画じゃねえんだから常に背中は合わせてらんねえしこの人数だ体力だって持ちやしねえよ！」

そう言う。二人は次々に回りから襲い掛かれる。

「だって漫画だと上手い事やってたんだから出来るかなあって思うのが少年の心じゃねえ！」

殴りかかってくるのを避けると襟を掴んで何度も殴りつけながら言った。隆は一度に一斉に來られて目の前の奴を一発殴ると回りから何倍もの攻撃を食らいそれでも構わず目の前の奴だけをどんどん倒していった。

「一人ずついくな一斉にやれ！」

それをきいた奴等は二人に一斉に飛び掛ってきた。一樹はなんとか避けながら殴り返すが次第に息も上がりだし攻撃を食らうようになってしまったが足元に金属バットが落ちているのに気づき拾い上

げて振り回し、回りにいる奴等を退かせると先で隆が羽交い絞めをされて数人に殴られ続けていた。

「とうつ！」

一樹は隆の所に走り出すと掛け声と共に跳び、ボディータックをする。隆は諸共そこにいる奴等が倒れこんだ。

「もつとちゃんと助けられないのかよお前は！」

そお言い倒れながらも一緒に倒れている奴を蹴り続けていた。

「ちゃんとしてどなんだよ？」

一樹はすぐに起き上がると持っていた金属バットで近寄ってくる奴を殴りつけていた。

「たかが二人に何やってやがる！早くやりやがれ！」

隆も起き上がり手には鉄パイプを握っていて容赦なく頭を叩きつけていく。

「おい、お前！」

隆が一樹を呼ぶ。

「俺はお前って名前じゃ・・・ない！」

喋ってる途中に殴られたが持ちこたえて殴り返しながら言った。

「こんな時に何だって良いだろ！」

反撃をしつつ一樹に少しずつ近づき言った。

「一樹だ！」

一樹が隆を後ろから殴りつけようとした奴に蹴りを入れながら言った。

「じゃあ一樹、俺はあいつさえやればいい。だから俺が道を開くからあいつをぶっ飛ばして来い！」

二人は始めと同じに背中合わせになり隆が集団の後ろで指揮をして偉そうにしている奴を目で合図して言った。

「賛成だけど反対。正直もうあそこまで行く体力がないのもそおなんだけど元はお前の喧嘩だろ？だったらお前が行けよ！ほら敵さんは待つちゃくれねえぞ！」

そお言つと金属バットを振り回し近くにいる奴等を殴りつけて道

を作つていくと囲まれている輪に隙間が出来そいつまでの道ができた。

「板垣、いけえ！お山の大将をやつつけちまえ！」

一樹は近くの奴に取り押さえられながらも隆に近寄る奴等を殴りつけていた。

「隆だ！」

隆は一樹に言う和一樹は倒れこみ囲まれて大勢に殴りつけられていた。隆は近づく奴等を振り切つてそいつまで走つた。

「誰かこいつを抑えろ！ぶっ・・・」

隆は止まらずそのまま敵の顔を殴りつけ倒した、そのまま馬乗りになつて殴り続けそいつはそのうち動かなくなつていた。隆は後ろから鉄パイプで頭を叩かれ倒れこむとそのまま押さえ込まれ殴り続けられた。

「一樹！やつたぞ！」

隆は大声で叫ぶとそのまま気を失つた。

「あのバカ・・・マジでやつた・・・だな・・・」

一樹もそれを倒れながら囲まれている隙間から見ると気を失つた。

9・過去（後書き）

今回から書き方を変えてみたのですがいかがでしたでしょうか？随時気になる点等アドバイスがあれば気軽にメッセージを頂けたらなと思います。

p . s

今回から同サイト内の白黒さんからアドバイスを頂き書き方を変えてみました。尚私の知識不足で読みにくいかもかもしれませんが、それについては白黒さんは関係ないのでその点も宜しくお願いいたします。

10・過去2（前書き）

まだもう少しだけ過去になるのですがもう少しだけお付き合いをお願いします。

10・過去2

それから三日後：

「．．．．ん．．ここは．．？」

隆は目が覚めると目の前には記憶にない天井が広がった．．辺りを見回すと、自分が寝ているベッドの他に幾つかベッドが並んでいてそこには何人かが横になっていた。

隆はベッドから起き上がろうとすると体中に痛みが走り顔を歪ませた。よく見ると体中包帯だらけで顔の半分以上がガーゼで見えなくなっていた。

「だめだってまだ寝てねえと、肋骨が何本か折れてるし他にもひびとか打撲で最低でも治るのに三ヶ月はかかるって言ってたぞ。」

隣のカーテンが開きそこには隆と大して変わらない姿の一樹がベッドの上から喋りかけていた。

「ここは？あの後どおなったんだ？」

「お前三日も寝てたんだぞ、まあ実は俺も昨日の夜目が覚めたばかりで詳しくは聞いてないんだけどあの時誰かが通報したらしくて警察が来たんだってよ、それでそのまま病院送りみたいな感じかな。でもよく俺等生きてたな、さすがに死んだかなあって思ったよ。」

一樹は説明すると枕元にあったナースコールを押した。

「三日も経ったのか．．。」

隆は悲鳴を上げる体に鞭を打ち横に置かれていた学生服に袖を通して始めた。

「ちよっお前何やってんだよ？」

「決まってるだろ、四中に行ってお礼しに行くんだよ。」

「バカ！そんな怪我で何が出来んだよ！行ってもやられるだけだぞ！」

一樹も包帯だらけの体を起こし隆を止めた。

「俺は負けちゃいけないんだよ！じゃねえと俺は俺じゃなくなっち

まうんだよ！」

隆は一樹の腕を振り払いながら言う。病室を出ようとした。だが入り口から入ってきた男に軽くぶつかっただけだが怪我をしていることもあつて簡単に倒れてしまった。

「悪いな、大丈夫か？」

男は隆に手を差し出して謝罪をするが隆はその手を払って痛みを我慢して一人で立ち上がった。

「なんだよ、謝つてんのかわいくなえ兄ちゃんだな、おつ！一樹起きてたか、おふくろに頼まれてた着替え持ってきてやつたぞ。ありがたく思えよ。クソガキ。」

男は一樹に荷物を放りながら言った。

「サンキュー、病院の服つてどおも着心地悪くてさあ。」

「喧嘩に負けた奴が生意気言つてんじゃねえよ！バア力！」

「ちよつと待てよ隆。これ俺の兄貴なんだ。」

一樹は隆を呼び止めて親指を立てそれを一樹の兄に指しながら言った。

「これつてなんだお兄様だろ！」

一樹の兄は軽く一樹の腹に拳を当てると言葉なく一樹はしゃがみこんでしまった。

「どおも……」

隆は一樹の兄貴に軽く会釈をするとそのまま去ろうとした。

「ああ君かあ、俺は一樹の兄貴で岡村 啓^{おかむらけい}だ。おふくろから聞いたよなんだっけ？イナガキ君だっけ？喧嘩強くて番長なんだろ？つか急いで何処行くんだ？このバカとあんま怪我が変わんないんだろ？」

「板垣ツス！……今からお礼参りに行くんすよ！」

隆は眼光鋭くし啓を睨みながら問いに答えた。

「だから無理だからやめとけて！行くならせめて怪我が治ってからにしろよ。」

啓に叩かれた腹が痛むのか手で押さえながら隆に歩み寄った

「だからお前には関係ねえだろ！」

「一樹、なんで止めんだ？行かせてやれよ！男が一度決めたことにいちいち講釈たれてんじゃねえよ！」

啓は二人の後ろから腕組をしながら一樹に怒鳴った！

「だけど兄貴こいつ本当に死んじまうぞ！」

「岡村．．．ありがとな、でも俺こうしなくちゃ俺じゃなくなっちまうからさあ。」

隆は一樹に言うとき啓に一礼した。

「隆．．．」

一樹は振り返り足取り重く去っていかうとする隆に何も言えずにいた。

「よし！じゃあそおと決まれば行くか！」

「えっ！？」

「えっ！？じゃねえよお前そんなフラフラ歩いてたら着くの何日かかるんだよ、そこまで俺が車で送ってやってやるよ。」

急に啓が言ったこともあり隆は目を丸くして驚いた。

「いやそこまではちよつと．．．」

「なんだよ実はそのまま逃げようとしてたんじゃねえだろおな？」

少し呆れた態度で隆に言った。

「んな訳ないつすよ、俺行きますよ！」

啓に言われ頭に血が上ったのか啓に近づきそお言い放った。

「だったら問題ないな、んじゃ行くぞ。」

隆はなんか腑に落ちない気持ちだったが先に歩いて行ってしまった啓の後を着いて行った。

「えっ？何？なんなんだ？」

一番良く分からない顔をしていたのはその場に取り残された一樹だった。

「どこまで行けばいいんだ？」

駐車場に着いた二人は啓の車に乗り込み啓が隆に聞いた。

「四中なんすけど、分かりますか？」

「あああそこか、分かるよ。」

「ってか普通置いていかないだろ!？」

後から来た一樹も車に乗り込んで二人に言った。

「あれ?お前も行くの?」

「隆が行くんだからしょうがねえだろ!」

「だから言つてんだろ岡村には関係ねえって!」

「うるせえ!行くつて言つたら行くんだよ!あと一樹だ!」

一樹は後ろから隆に怒鳴ると胸が痛むのか胸を押さえながら苦しそうな顔で言つた。

「わかつたよ、一樹。」

「熱血は終わったか?僕達?」

「すいません、お願いします。」

三人を乗せた車は目的地に向かって走り出した。

「着いたぞ。」

数十分走ると三人の乗つた車は一つの学校の正門に着き三人は車から降りた。下校時間なのか校舎から生徒が出てきていた。

「なあ申し訳ないんだがこの番長?頭?の人呼んで来てくれないかな?こいつが話があるんだって。」

啓は一人の真面目そうな生徒に隆を指差しながら言つた。

「多分その人でしたらもう少しで来ると思いますがよ、さっき玄関にいましたから。」

「わかつたよ、サンキュー。」

真面目な生徒は軽く頭を下げると帰つて行つた。

「隆だっけか?そろそろ来るってよ。」

啓が隆に聞くと隆は校舎から出てくる奴等を睨んでいた。

「隆あいつ等・・・」

「わかつてる。」

一樹が隆に言つと隆は音が聞こえるぐらいに拳を握り締めていた。
「ん?あそこにいるの・・・誰だ?」

下校してくる生徒が隆に気づくとさっきまでふらついていたのが

嘘のように隆は走り出した。

「あつ！板垣だ！！」

それに気づいた時にはもう目の前まで隆は近づいていて先頭にいた奴の顔を殴りつけ近くににいる奴も同様に殴り続けた。

「おいみんな呼んで来い！板垣が乗り込んできやがった！」

そう言ってる間にもそこにいた奴を倒すが体が言う事を聞かず殴りつけられ隆は倒れこんでしまった。

「おい今だやつちまうぞ！」

隆は怪我のせいか体が思うように動かずひたすらに蹴り続けられていたが、そこに一樹が走り込んできて隆の周りにいる奴等を殴りつけ隆を起き上がらせた。

「今度は逆の立場になったな、ってかちよつとは考えて行動しろつての！」

「お前にだけは考えて行動しろつて言われたくねえつての。」

「そりやそおだな。」

一樹は隆に言われ少し考えると微笑しながら答えた。

「やべえ、かなり集まってきたぞ。ちなみに俺来たはいいけど正直動けないんだよね・・・」

「心配するなよ俺も一緒だ。ただここの頭だけでいいからぶっ飛ばさないと気がすまないんだよ。」

そお言ってる間に回りにはかなりの数が集まっていて逃げ場もなくなっていた。奥から一人の男が一樹と隆の前に現れた。

「よお板垣、元気そおだな？死んでくれたと思ってたのに残念だよ。あとお前の所の奴等ちよつといじめてやったら二度と逆らわないから許してくれて泣いて頼んできたぞ。」

四中の頭は隆を馬鹿にした言い方で薄ら笑いをしながら話すと隆がそいつに向かっていき殴りつけると回りにいた奴等に取り押さえられてしまった。

「てめえ殺してやる！」

「おお怖いもお前邪魔だから消えてくれよ。もお二度と齒向かえ

ないようにしとけ。」

取り囲む奴等に言うその後ろに下がって行つた。

「てめえ逃げんじゃねえ！」

隆の叫びも空しく掴まれていた奴等に取り囲む中心に投げ飛ばされてしまった。頭の合図で取り囲む奴等は襲い掛かり二人は身構えるが怪我のせいもあり大した抵抗も出来ず殴られ続けてしまい二人とも倒れこむと奴等も殴るのを止めた。

「一樹．．．悪いな巻き込みまして．．．」

「本当だよ．．．って言いたいがしょおがねえだろダチなんだからよ。」

「バカこんな時に笑わせんじゃねえよ．．．」

二人の所に頭が来てしゃがむと倒れている隆の髪を掴んで持ち上げた。

「板垣、泣いて謝るんならこのぐらいで許してやるよ。」

「てめえが泣いてどおしても謝ってくださいって言うなら考えてやるよ。」

頭はそう言った隆を殴りつけると立ち上がった。

「おいこいつらもおいらねえ痛めつけてどっか捨てて来い！」

取り囲む奴等は二人を立たせ押さえると殴り始めようとした時どこからか手を叩く音が聞こえ一同がそこを見ると啓が手を叩きながら歩み寄ってきた。

「最近の中学生は映画の見すぎなんだねえ、その番長かな？いい台詞だねえ役者めざしたら？」

笑いながら集団に近づく一人の生徒が掴みかかってきた。

「こらおっさん！てめえがくるような所じゃねえんだよ消えてろ！」

啓はムツとした顔を見ると生徒の顔に左手を置くと瞬時に右手で左手の中指を摘んで弾くと生徒は額を押さえてうずくまってしまった。

「おっさんって誰に言ってたんだよ！まだ俺は18才だ！」

それを呆然として見ていた奴等も我に返ると三人が飛び出した。

「バカ！やめとけっ！」

一樹が言うのを聞く訳もなく三人は啓に殴りかかった、だが啓は殴りつけてきた拳をかわし懐に入ると額に頭突きをした！もう一人の頭を掴むとそのまま額に頭突きを入れた瞬間後ろから不意に一人が殴りつけてきたがそれを片腕で止めるとそのまま握り潰そうとするとそのまま生徒は座り込んでしまった。

「人の忠告は聞いとくもんだぞ、少年達。」

啓は掴んでいた手を離すと二人は起き上がってこなく一人は手を押さえたまま動かなかった。

「てめえ誰だこの野郎！」

一人が啓に問いただした。

「俺？そこに倒れてる奴のお兄ちゃん。別に加勢しにきたわけじゃないから勝手にやっていいぞ。」

「まさか．．．おい！お前の名前なんて言っただ？まさか岡村じゃないよな？」

頭は震えだすと一樹に聞いた。

「何で知ってんだよ？お前に自己紹介した事ねえぞ！」

それを聞くと頭は集団を掻き分け啓の前まで行くと深く頭を下げた。

「失礼しました！二人が岡村さんのお知り合いとは知らず大変失礼しました！二人はこのまま帰っていただき今後手出しを致しませんのでどうか許していただけないでしょうか！？」

頭は啓の前で頭を下げたまま震えながら言った。

「俺は何も関係ねえよ、そのバカ共が勝手にやった事だから気にしないでいいし好きにやってくれ。一般市民として見学に来ただけだしな。」

「はい、ありがとうございます。おい！お前等二人を離してやれ！これで終わりだ。」

頭はそれを言うとり囲む奴等は二人を離れた。隆は自由になると啓に掴みかかった。

「あんたがどんだけ偉いか知らねえけどこれは俺の問題なんだよ！部外者は下がってくれよ！」

啓は襟首を掴んでいる隆の腕を外すと言った。

「なあお前が今のここの頭か？」

「はいそうです！」

「なんだこの有様は？怪我人二人に寄って集って袋にして頭は何もしねえで、俺等ん時の四中とは偉い違いだな。」

「いや・・・あの・・・」

啓に言われ頭は震えだし下を向いたまま黙ってしまった。

「特に何も言うつもりはなかったがこれじゃ四中の恥になんぞ。頭としてどお責任取るんだ？」

頭は震えたまま何も言えなかった。

「じゃあこうしろこのバカとタイマンはれ！そおしたらこのバカも気が済むだろうしお前もこんな怪我人相手じゃ負けねえだろ？そおしたら恥かかねえで済むだろ？」

頭は隆を見るとそこには立っているだけでも辛そうな姿があった。頭は啓の顔を見ると頷いた。

「じゃあ決まりだ頭同士のタイマンだな、勝っても負けても恨みっこナシ！二人ともいつでも初めていいぞ。」

啓はそう言うで一樹の所まで行くとタバコを咥えて火を付けた。

「板垣てめえは殺す！」

「さっきまでビビッてた奴が言っても怖くねえぞ！」

頭が先に殴りつけるとかわす体力がないのかモロに顔面に食らってしまいよろめきながらも殴り返すがすんなりとかわされてしまった。

「兄貴、なんでこんな風にしちまったんだよ？隆はもお立ってるだけでも辛いんだぞ！」

「だからお前はバカだって言ってたんだよ、まあ黙って見てろよ。」

一樹は啓の言う事がわからなかったが黙って隆を見ていた。

隆は何発も殴られ倒れずにいるのが精一杯のようである事さえも

出来なくなっていた。

「もお負けでいいから止めてくれよ！兄貴！」

一樹は啓の肩を掴みながら言う。啓が言った。

「見てろよもお決まるから。」

啓が言う。一樹は二人を見た。だが状況は変わらず隆が一方的にやられているだけだった。が次第に頭の息が切れてきて一気に勝負をつけようと大きく振りかぶった。

「これで決まりだ！死ねえ！」

振りかぶった拳は隆に勢い良く襲い掛かった！拳は隆の頬に当たるが首を曲げて逸らすと、下から思い切り突き上げた拳がカウンターの頭の顎に直撃し体が少し浮きそのまま力なく崩れ落ち動かなくなっていた。

「これで勝負ついたな。今回はこれで終わりだ！両方ともわかったな！？あと今後は俺は関係ないから好きにやってくれ、ただ恥じになるような事はするなよ！」

啓が言う。と取り囲んでいた奴等は混乱しているのか誰一人として動かなかった。

「結局兄貴がおいしい所全部持っていつちまいやがったよ、俺なんて今日殴られに來ただけだぜ。なあ隆。」

一樹が隆に近寄ると丁度倒れそうになった所を一樹が支え肩を貸した。

「お前等よく聞けよ！俺は逃げも隠れもしねえ！だからいつでもかかってこいや！うちの中学の奴等なんて関係ねえ俺と一樹が相手してやるからよ！そいつにも起きたら言っつけ！」

「俺もお！？」

隆は取り囲む奴等に言う。一樹に肩を借りて歩き出すが二人ともふらふらで真っ直ぐに歩けなかったが車までなんとか辿り着いた。

「隆やったな、お前すげえよ！」

「一樹がいなかったら無理だったってえの」

二人は手を上げて叩き合ったが衝撃でこの間の怪我と今回の怪我

の痛みが我慢できずに倒れこんでしまった。

「あらら〜こいつら余程限界だったのかな？こりやおふくろにキレられるな・・・」

啓は二人を車に乗せて病院へと戻り二人が眠りから覚めるのは数日後の事だった。

余談だが病院に着いた後重傷者が二名病院から抜け出した事で大騒ぎになっていてそこには一樹の母もいて啓は母からも病院からも数時間に渡り説教を喰らった挙句飯は抜きだった。

そんな事など二人は考えもせずただ疲れた体を癒すために眠っていた。

11・過去3

あの出来事から数ヶ月が過ぎ一樹の退院が決まり岡村家では家族みんなで一樹の帰りを待っていた。

「ねえ時間もうとつくに過ぎてるよ、やっぱ迎えに行った方がよかったんじゃないの？」

一樹の妹の和美が心配そうに何度も時計を見ながら言った。

「一樹が恥ずかしいから来ないでいいって言うからさあ。」

「もおガキじゃないんだし心配する必要なんてねえって、それよりなんで俺まであいつ待ってなくちゃなんねんだよ？夜仕事あるから少しでも寝たいんだけど。」

一樹の母も心配なのかテーブルの上に用意された料理を見て溜息をつきながら言う母に対して眠そうな目をこすりながら不満もかねて啓は言った。

「入院が長引いたのだって啓、あんたにも責任があるんだから文句言わないの！」

「へいへい、俺が全て悪いんだよつと。」

啓はそういうと席を立った。

「啓何処行くの？」

「ターバーコー。」

啓は空になったタバコの袋を握り潰すのを見せると玄関に向かっていった。すると玄関先でなにやら話し声が聞こえ啓はおもむろに玄関を開けた。

そこには一樹が立っていて塀の影に隠れていて見えないがその人物ともめているようだった。

「おう帰ったか遅かったな、みんな待ってんぞ早く入れよ。」

「ただいま、いやあこいつがどうしてもヤダって聞かないからさあどうにかここまで連れて来るのにも苦労したんだって。」

啓は首を傾げて塀を覗き込むとそこには隆が気まずそうに隠れて

いて啓に気づくと苦笑いをし会釈した。

「お前かぁ、退院一緒だったのか？つてかこんなところもなんだから上がって行けよ。おゝいおふくろゝ一樹帰ってきたぞぉ！」

「やっぱ俺帰る。」

「何言つてんだよここまで来たんだから上がったつて一緒だつて。兄貴さぁこいつ一人で入院してるのがヤダからつて無理やり退院してきたんだぜ、看護師さん軽く切れてたな。」

一樹の怪我の治りが早かったとゆうか隆の怪我が思つてた以上に酷かったのか動くときに足を少し引きずっているようだ。

その時玄関には一樹の母が来ていた。

「一樹随分遅かったじゃないお父さんも待つてるから早く入りなさい。．．．あらその子一緒に入院してた子じゃないの。」

「まあなんてゆうかとりあえず当分こいつ家に泊めてもいいかな？」
「だからいいっていつてんだろ！」

一樹が母に言うとは隆は迷惑そうに声を荒げて言った。

「別に構わないわよ。そんな事よりお腹空いたんじゃない？みんなでご飯食べましょ。ほら入って入って。」

隆はまさかそんな返事が返ってくるとは思つてもいなかったのでした。たまたま固まっていると一樹が肩を叩き顎先で合図をすると一樹は玄関に入っていく、その後をキョロキョロ目配りしながら隆も入っていった。

「ただいまぁ。やっぱ家が一番だよなぁ。ほら隆も来いって。」

「あ．．．ああ、おじやまします。」

隆はなんとか聞き取れるくらいの小さな声で言うとは一樹の母が近寄ってきた。

「板垣君だったよね、帰ってきたらただいま、おかえりでしょ！」

「いやでも．．．」

隆は俯きながら声を濁しながら言った。

「板垣君、ウチに当分いるって事は最低限ウチの決まりことは守ってもらうからね。わかった？」

「は．．はい。」

「よし決まり、今日からみんな家族だから気兼ねしないで普通にからね。あと板垣君じゃ呼びづらいわね、名前何て言うの？」

「隆です。」

「じゃあ隆、そのボロボロの学生服着替えてきちゃいなさい、その間にご飯用意しておくから。」

「あ、あの．．着替え持つてないから．．。」

「だったら一樹の勝手に着ればいいじゃない文句言うようならあいつの服全部燃やしちゃうから。」

一樹の母は隆の肩をバシバシと何度も叩き笑いながら言った。

「おい聞こえてるんですけどお。」

「あら？いたの？」

「燃やされちゃたまったもんじゃないんで隆さん部屋まで来てもらつてもいいツスカねえ？」

一樹は母親を笑いながら睨むと隆にも皮肉を入り混ぜて言った。

「ほらさっさと着替えてきな。」

一樹の母は隆の背中を平手で叩くと一樹と隆は部屋へと向かった。部屋に着くと一樹は隆に合う洋服を探し始めていた。

「適当に座つててよ。」

「あ．．ああ。」

隆は部屋を見渡すとそこにはベッドの他にはパソコン、ギター、スノーボード、等最近の学生の部屋とゆう雰囲気だった。隆はギターの弦を指で軽く弾くと綺麗な音が響いた。

「それさ兄貴から貰つて最初はやる気あつたんだけど中々上手くならないから止めたんだ。何？興味あんの？」

一樹は隆に着替えを渡すとギターを手に取りパソコンの前にある椅子に腰掛けギターを弾き始めた。

上手いとは言えないが静かな音色が広がり一樹がそれに合わせて歌い始めた．．．

ギターの音色と歌声が終わると一樹は元の場所にギターを戻しな

がら言った。

「人前でやんの恥ずかしいな、なっ下手だろ？」

一樹は苦笑いをしながら言う。とタバコを咥えて火をつけた。

「まあギターはな、でも歌は結構いいと思う。」

「そっそおか？ いやあカラオケ以外で人前で歌うの初めてだからそお言われると余計に恥ずかしいな。」

椅子に座りながらクルクルと回ると頭を無造作に掻き毟り照れていた。

「それより本当にいいのか俺なんかが転がりこんじまっても？別に帰る所がないわけじゃないから別にいいんだぞ。」

隆は置かれたギターを見つめていたが急に真剣な眼差しで照れていた一樹に言った。

「いいじゃんおふくろもいって言ってたし兄貴だってお前の事気に入ってくれたみたいだしな。でも和美には手出すなよ！兄貴異常な程和美には過保護だからな。」

椅子の上に座りながら胡坐をかきながら話していたがいきなり隆に指差して言った

「出さねえよ！ってか何でお前は俺にそこまでしてくれるんだよ、喧嘩もそおだし何でだよ？」

隆はずっと疑問に考え思っていたことを言う。と一樹は少し考えて話し始めた。

「俺さガキの頃病弱ってか生まれた時にはなんか思い病気にかかってたみたいで長く生きられないって言われてたんだよ、今までに世界でも数人しかなかった事がないらしくてな。」

正直まだガキだったから一つも覚えてないんだけど頭の奥底には記憶があるみたいで今でも時々夢見るんだよ。」

一樹は机から一枚の写真を出して隆に渡すとベッドに腰掛けた。

「もしかして一樹・・・か？」

写真にはベッドの上には点滴等で管だらけのガリガリに痩せた子供が写っていた。その回りには小さな男の子と若い頃の一樹の母と

その腕に抱かれた赤ん坊とその横には男性が写っていた。

「そつたしか四歳って言ってたかな、その時はもう何をしててもダメらしくて最後に家族で写真を撮ったんだってさ。」

「ダメってどおゆう事だよ？今お前ここにいるじゃねえかよ。」

「大丈夫だよ幽霊でもなんでもねえから。実はなその後なんか製薬会社がその病気に効く可能性がある薬品と治療方法があるってゆう申し出があつてさ、助かる可能性があるならって訳でお願いしたんだよ。」

製薬会社もそれで治つたら富と名声が手に入るわけだから医療費はあつちで負担するって言ってくれたんだ。でも代わりに見通しがつくまでは機密漏れの恐れがあるから面会は出来ないって事だったけど治るならそんな事ぐらい構わないって事で了承したんだよ。」

一樹はタバコを啜えて火をつけると隆から写真を受け取りそれを見て少し黙っていた。

「それでもお治つたのか？もしかして長くないとかか？」

隆は悲痛な目で一樹を見ながら言った。

「そんな顔すんなよ、もお大丈夫完治したよ今はもう大丈夫だよ。まあまだ数ヶ月に一回検査しに行ってるけどな。．．ただ正直覚えてはないんだけどその時はいい思い出？ってのはなかったなあ、真つ白い部屋にいて何人かが俺に注射かわかんねえけど薬打ったりされてさ親父とおふくろが面会に来るまで誰とも話してなかった記憶はあるよ。どのくらい月日がたったのかわかんないけど一年ちよつとで退院してさそれからガリガリだった体も肉がついてきて運動も出来るようになってきてさ、嬉しかったなあ親父とおふくろのあの喜んだ顔。」

「治つた事が嬉しかったんじゃないのか？」

「それもあつたけどガキながらも思つたんだ俺には家族がいるって．．だからこれからもずっと大事にしていこおってさ。あと今までこの話し誰にもした事ないから内緒な。」

「家族か．．．」

「俺はなんかどつかを隆と似てるなって思ってた放っておけなかったんだ。もしここに居るのが嫌で出て行きたかったらもお止めないよ、ただもしそおなっても俺等ダチだよな。」

一樹はタバコの箱を持ち蓋を開けて隆に差し出すと隆は一本取り出し口に咥えると一樹がそれに火をつけた。

「あゝあ面倒くせえ奴と知り合つちまったなあ、回りにいたダチはお前がみんなぶつ飛ばしちまったからもお誰も寄り付かねえしこの際贅沢いつてらんねえか。」

「あれがダチ？手下つてか子分みたいだったぞ！」

一樹は驚いた顔で隆を茶化した。

「うっせ！俺といると面倒に巻き込まれるぞ？それでもいいのか？」

「嫌だったらもお今一緒にいねえよ。」

「じゃあしよおがねえからダチにしてやるよ。」

「一樹さん僕友達いないから友達になつてくださいだろ。」

二人は少しづつ笑い始めると声をあげて笑っていたが一樹が時計を見ると我に返った。

「やつべ早く着替えて行かねえとおふくろにぶつ飛ばされるぞ。」

一樹が焦りながら言うのと隆は少し考えて立ち上がりながら言った。

「一樹、俺今日帰るよ、やつぱり親父さんもおふくろさんも兄貴さんも妹さんもお前が大事だと思う．．．だから今日みたいな日は俺みたいな奴はいない方がいい．．．」

「俺みたいな奴つて何だよ！」

隆が言い終わるのを待たずに一樹は言い放った。

「ほら俺施設出だろ、だから．．．」

「だからなんだ？何がダメなんだ？お前が言ってる事になんかまずい事でもあんのかよ？」

隆の肩を掴み一樹は切ない目で何度も言った。

「いやだから普通の家庭と違うからやつぱり．．．」

「普通の家庭つてどんなんだよ？お前とウチの誰かは何かが違うのか？俺にはわかんねえよ。」

掴んでいた手を話すと椅子に腰掛けた。

「一樹．．．」

「とりあえず飯食ってけよ、着替えていかねえとおふくろキレるぞ。怒らせると後が怖えぞ。」

一樹は隆が着替えるのを待つてると部屋のドアが開きそこには啓がいた。

「おふくろが早くしろだつてよ。」

「ああごめん今行くよ。」

二人は急いで部屋を出て啓の後を着いていった。

「一樹．．．今度昔の話し聞いてくれるか？」

「お前が話したい時いつでも聞くよ。」

三人はリビングに着くとそこにはみんな集まっていた。

12・時間（前書き）

今話で過去も終わり現在に戻りましたのでこれからも宜しくお願いいたします。

12・時間

一樹と啓は空いていた席に腰掛けると隆は一樹に言われその隣の椅子に腰掛けた。

「じゃあみんなそろった事だし始めましょうか。」

一樹の母は隣に座る一樹の父にビールを注ぐと一樹と隆にもグラスを差し出し一樹のグラスにビールを注いだ。

「ほら隆も飲めるんでしょ？」

一樹の母はビール瓶を差し出すと隆は軽く会釈してグラスを差し出すとグラスいっぱいにはビールが注がれると隆はビール瓶を受け取ると啓に差し出すと御酌した。

「じゃあお父さんなんか一言お願いしますね。」

一樹の父はグラスを持つと軽く咳払いすると話し始めた。

「えー隆君だったな、一樹と隆君退院おめでとう。まあこれからはなるべく怪我のないように気をつけるように、では乾杯。」

「乾杯」

一樹の父はグラスを持つ手を少し上に上げると皆々も同じように上げ隣同士等でグラス同士を合わせた。

「さあて何から食べようかなあ。隆、遠慮なんかしないでいいかな、病院食よりかはイケるぞ。」

一樹は隆に言うのとテーブルに用意された料理を皿に取り分けていると隆は何かを思ったのか話し始めた。

「あの．．．えっと．．．あらためて紹介させていただきます、初めまして板垣隆です。いたがきたかし今日は家族水入らずなのに俺なんかお邪魔してしまつてすいません。実は一樹が怪我したのは全部俺のせいなんです、だから俺ここに居るべきじゃないんです．．．だから．．．」

隆は俯いたまま話していたが、それを止めるかのように一樹の父が話した。

「隆君、一樹は怪我した事に君に不満でも言つたのかな？」

「・・・言われてません・・・」

「だったらそんな細かい事気にすることないんじゃないかな。友達ってのはそんなもんだと思うぞ。」

一樹の父はグラスを口に運ぶとビールを飲み干すと一樹の母がグラスにビールを注いだ。

「そうよ、ウチは嫌な物は嫌って言うから言われなければ気になんてしないでいいのよ。」

「そおだよ隆！気にしないで食えって、好きなだけ居ていいんだからな。」

一樹は皿にいくつか料理を取り分けると隆の前に置きビール瓶を持ち隆に差し出すと隆は黙ったままグラスの中のビールを飲み干し一樹にグラスを差し出す。

「そおそお飲んで食べて今日は楽しもうぜ。」

一樹は差し出されたグラスにビールを注いだ。

「じゃあそれなら私も飲んじやおっかなあ。」

和美が自分のグラスにビールを注ごうとしたら一樹の母に腕を捕まれて阻止された。

「あんたはダメ、まだ子供なんだから。」

一樹の母はビール瓶を取り上げると和美は頬を膨らませながら言った。

「えゝだってカズ兄と歳一個しか違わないじゃんなんでカズ兄だけ良くて私はダメなの。」

「ダメな物はダメなの。」

「まあいいじゃないか今日ぐらい、なあ母さん。」

一樹の母は軽いため息をつくるとビール瓶を和美に渡した。

「飲み過ぎちゃダメだからね、もおお父さん責任とってくださいね。」

「やったねえ。」

和美は話しも聞かずにグラスにビールを注ぐとそれを一気に飲み干しましたグラスにビールを注いだ。

「隆君話しが途中だったが隆君が良かったら好きなだけ居るといいよ。ただし条件はあるがね。」

「条件ですか？」

「ああウチは時間が合わないとき以外は一緒にご飯を食べること、あと一緒に住むのなら私達は家族なんだから遠慮せず何でも言うこと。わかったかな？」

「そんな．．．だって俺．．．施設出だから家族とか．．．」

一樹の父の問いに困り自分にみんなの視線が集まっけていて啓と目が合った。

「隆！そんな事どおでもいいんだよ！親父が聞いてんだ、ちゃんと返事くらいしろ。」

隆は目を瞑り数瞬間を置くとそこに立ち上がった。

「親父さん、お袋さん、啓さん、妹さん！至らない点ばかりだとは思いますが少しの間御世話になります。」

隆はその場で深く一礼した。

「ああ隆君宜しくな。」

「少しなんて言わないで居たいだけ居ていいんだからね。」

「じゃあタカ兄だね、そおなるとカズ兄じゃないんじゃないの？」

和美が冗談交じりに一樹の母に言った。

「そおね隆の部屋も用意しなくちゃいけないしこの際だからいらないのは処分しちゃおうか。」

「こらこら誰がいらぬ物だよ、危険な奴らだな。ってか隆もだよみんなに御世話になるって言うておいて俺にはないのかよ！？そこ重要なことだぞ。」

一樹の母と和美を交互に指さしながら言うつと次は隆の肩を軽く叩きつつこみを入れて言った。

「えっ？どなたでしたっけ？お袋さん知ってます？」

「さあどなたかしら？」

「啓兄にどっかから着いてきちゃったんじゃないの？」

「俺はそんな事言えないって、酷いやつ等だねえ。」

「ほらみるやつぱ兄貴は違うね。」

「でもそろそろ自分の家に帰った方がいいんじゃないの？僕。」

「やつぱそおくるか。」

全員の笑い声で今までの重かった雰囲気はなくなり食事を初め飲んで騒いで隆には家族でこんなに楽しむのは初めてなので新鮮さを感じこの家族に暖かさを感じた。

一樹の家に一緒に住むようになり四六時中一樹と行動を共にし学校でも少しずつだが陰が取れてきた。

隆も初めはギクシャクしていたが一樹のペースと一樹の家の明るさで隆も少しずつ打ち解けていき高校も初めは行く気などなく働くと決めていたが一樹の親に進められるのもあつて一樹と同じ高校を受けることになり猛勉強の末見事合格となり、そこで直美や信と知り合うことになる。

現在

一同が隆の話に聞き入りながら食事を終えた。

「だから俺の家族は一樹の家族以外に考えられないんだ。あの日食べた飯は今でも鮮明に覚えてるよ。生まれて初めて母親の料理を食べたって気持ちで一杯だったよ。」

話が終わるころにはみんな食事も終わり隆はズボンからタバコを取り出すとそれを口に咥え火をつけた。

「そおだったの・・・」

正志の母は話を聞き終わると物悲しい目で隆を見つめた。

「なんか空気悪くなるような話してすいません。でもお袋さんの料理も本当においしかったです。ご馳走様でした。」

「こんなものでよければいつでも食べに来てくれていいのよ。」

「是非。」

正志の母は空いた皿を片付け始めると梨乃と莉奈も食器を下げテ

「ブルを拭き隆と正志にお茶入れると莉奈が言った。

「おじさん昔不良だったんだあゝなんか笑える。やっぱ髪型とか制服って漫画に出るみたいなやつ？」

「だからおじさんじゃないっての！」

「じゃあおじちゃん？それでどおだったの？」

隆はため息をつくときタバコを灰皿に押しつけ火を消しお茶を啜った。

「まあ髪型と服装はそおだったけど一樹と知り合って中学卒業と同時によめたよ。なあ一樹？．．．あれ一樹は？」

隆は辺りを見回すがそこに一樹の姿はなかった。

「そおいえば隆が話してる途中になんか出て行ったわよ。」

梨乃が洗われた食器を拭きながら言うとき隆が不安気味に聞いた。

「どこに？」

「一樹さんなら恥ずかしいから出てるって言ってたよ、あとついでに敷地内が安全かどうか調べてくるってえ」

「ったくあいつは勝手な行動しやがって。でもまあ一樹なら心配ないだろ。」

そのころリビングに集まる一同を余所目に一樹は家の外にいて警戒しながら進むとき裏口につくと塀に寄りかかり持っていたコルト・ガバメントとニューナンプに装填を済まし一呼吸していたら何かが一樹に近寄ってきた。

「誰だ！？」

一樹はそれに対してニューナンプを構え引き金に指をかけた。

「待ってくれ私だよ。」

暗闇から現れたのは正志の父だった。

「親父さんどおしてここに？」

一樹は構えていたニューナンプを下ろすと驚いていた。

「なにか裏口から物音がするんで窓から外を覗いたら君が外に出て行くのが見えたんでね。」

「でも絶対安全じゃないのに危険ですよ、早く戻ってください。」

「わかったよじゃあ戻るとするかな、ああそうだ君はどおするんだい？一人で行くのかね？」

正志の父は一樹に言われ戻り始めるとすぐに振り返り一樹に言った。

「えっ、いや、あのおゝ．．．」

「いいんだ正志の事なら、初めて君に会った時から目を見てわかったよ。あの友達隆君にも言わなくていいのかね？」

正志の父の問いに一樹は少し黙り話し始めた。

「俺のわがままでみんなを危険な目に合わせれないし時間もないんですよ。」

「時間？何かあるのかね？」

「実は初めはメールが返ってきてたんですけど数時間前から連絡がこないんです、無事でもそおじゃなくても行かなくちゃならないんです！」

「こんな暗闇の中出ていったら目的の場所に着く前にあいつらの餌食になり得ない、だったら明日明るくなってからでも遅くないんじゃないか？」

一樹はまた少し黙ると左腕の袖を捲ると傷口を正志の父に見せた。

「何て事だ．．．」

「だから今行かないと時間がないんです、俺がここに居ても後々みんなに迷惑をかける事になるし、もしあいつが生きているなら最後までにあいつに会いたいです。」

正志の父は一樹を見つめると裏口に歩み寄った。

「行くんだろ？出来るならその人を連れて戻って来てくれることを祈ってるよ。」

「親父さん．．．」

「他に私に出来ることは？」

「大丈夫です、ただみんなには傷の事言わないでおいってください。」

「．．．わかったみんなには私から上手く言っておくよ。」

「ありがとうございます．．．じゃあお願いします。」

正志の父は門に手をかけると一樹はコルト・ガバメントを扉に構えると扉から門は外されゆつくりと少しだけ扉が開き一樹は外を覗いた。

「大丈夫みたいです、じゃあ行つてきます。みんなに元気で伝えてください。」

「わかった、気をつけるんだぞ。」

一樹は正志の父を見て頷くとゆつくりと外に出て塀を背にしながら車に近寄つていくと裏口はゴトゴトと音を立て閉まった。

「この世に神がいるのならあの子をどうか護つてやってください。」

一樹は車まで近寄ると音を立てずに車に乗り込みエンジンをかけると走り始めた。

正志の家を出てから少し走り始めると少数だがゾンビがいるのが見えたが一樹はお構いなしに突っ込んでいくと鈍い音が静寂な夜の帳へと消えていく。

大通りに出るとゾンビ共はこれといった活動はしていなくただその場所に佇んでいるだけであつたが一樹の乗る車の音に気づくとゆつくりと歩み寄ってくるが車のスピードには追いつけなく走りすぎていく車をゆつくりとついて行くだけだつた。

「視界は悪いがなんとか行けそうだな。」

一樹は避けれるゾンビは避けていきダメな場合は跳ね飛ばしながら漆黒の闇の中を走り去つて行つた。

暗闇の中民家やマンションから漏れる明かりが見えるとまだ生存者はいるんだなと思ひながら走っていると遠くでかなりの数のゾンビが集まっているのが見えスピードを緩めた。

「あそこに何があるんだ？」

一樹はそれを避けて通ろうとするがバリケードがあるのを一瞬早く分かり急ハンドルを切り車は横に振れるとそのまま横に進むが間一髪バリケードと車の隙間は何十センチも開かず止まった。

「くそ！危ねえ、何でこんな所にこんなもんが・・・？」

よく見るとそれは車を横にしてあつたりテーブルやタンス等で作られているのを見る限り人為的で一人や二人じゃ出来ないことを物語っていた。

そこに集まっていたゾンビが一樹の車に近づいてくるが一樹はすぐに車を走り出すと横の道へと抜けていった。

「なんであんな所にバリケードなんか出来てんだ？横道から入られたら意味ねえだろ。」

一樹は独り言でばやき測道を走っているとまたしてもバリケードが目の前に現れ急ブレーキで停まった。

「まあなんとなくそおじゃねえかとは思ってたけどやべえな。」

近くにゾンビはいないもののこれだけ暗いとどこに潜んでるか分からないし病院までまだ距離があるためどうしても車が必要なので少し考えると車を降りてバリケードを退かせれるか考えていたが一人ではどうしようもなかった。

「しょうがねえダメ元で突っ込んでみるか。」

一樹は車に乗り込みギアをRに入れバックして距離を取ろうとした時運転席側の窓がコツコツと鳴りそつちを振り向くと一樹に銃を構えた男がいた。

「エンジンを止めて早く降りろ！早くしろ！」

男は一樹に言うが一樹は男を横目で見たままホルダーに手をかけコルト・ガバメントを取り出そうとしたが男に抑制された。

「妙な事をすれば即座に発砲するぞ早く降りろ！」

一樹は致し方なく車から降りると男に銃をつきつけられた。よくみると周りには他にも何人かが潜んでいるのが見えたが銃を持っているのはこの男だけみたいだ。

「一人か？こんな所で何をしている？」

一樹はその男を睨みながら言った。

「人を助けに行く途中で大通りにバリケードがあつたからこつちに抜けてきたんだ、そしたらここでもこれってな訳だ。」

男は他の仲間に目で合図をすると一樹の近くに鉄パイプや包丁等

を持った三人が寄ってきた。

「ここは危険だから着いてきてもらおうか。」

男が言うと他の者が一樹の後ろに立ち背中に包丁を押しつけられ横のビルへと入れられると奥へと進みまた外へと出されると路地に出た。

「どこ行くんだ？」

「うるさい黙って着いてこい！」

「へいへい。」

一樹は馬鹿にした返事をする後ろを歩いていた男が気に入らなかつたのか銃を持つ男に言った。

「誠さんこいつやつちやいましょうよ！ゾンビ共に噛まれてるかもしれないし。」

一樹は背中を押しつけられていた包丁が離れるのが分かると四人の他に誰もいないのを確認すると後ろの包丁を持った男に振り返り包丁を持つ手を左手刀で払うと腹に右肘鉄を入れ顎先に左拳を打ち上げると左にいた奴を後ろ蹴りをして吹き飛ばした。

銃を持った男が一樹に銃を向けた瞬間そこに一樹の姿はなく瞬間銃を持つ男の後ろに回っていた一樹は膝の裏を踏みつけ男が膝をつくと横面を右拳で打ち抜くと男は崩れ落ちた。

それを見ると他の二人が襲いかかってくるが一樹は落ちていた銃を拾うと二人に向けた。

「そこまでだ、武器捨ててもらおうか。」

二人は一樹の指示に従い持っていた武器を捨てた。

「じゃあいくつか聞きたい事があるんだが、お前等何なんだ？」

「俺たちは選ばれた者なんだ、だからこの国は俺等で変えていくんだ。」

「あつそお．．んじゃあ俺には関係ないからどうでもいいんだけどこの先にある第一総合病院に行きたいんだけど他に道は？」

「あのビルを中心に半径2〜300メートルぐらいはバリケードが作つてあるだからそれを迂回していけば行けるはずだと。」

男が指さす方を見ると20階建て以上のビルがありそれから2、300メートルぐらいなら大した迂回にはならないと考えていた。「わかった、んじゃあもお邪魔するなよ。」

一樹は来た道を戻ろうとすると後ろから二人が襲いかかってきたが一樹はスツと横に避けると一人の顔面に飛び膝を入れ倒れた所で顔を踏みつけるともう一人の男がまた襲いかかってくるが振り下ろされる鉄パイプを受け流すとその腕を掴み後ろに回すと取り押さえた。

「お前等やられキャラの定番すぎだろ、まあいいけどなっ！」

一樹は男の頭を掴むとビルの壁にぶつけ気絶させた。

「無駄な時間を過ごししまったな。ちつこんな時間か急がねえと。」
携帯を見ると19:50になっていた。一樹は来た道を戻り車にたどり着くがそこにはゾンビが数体群がっていたがホルダーからコルト・ガバメントを取り出し全弾使い殲滅させると車に乗り込みコルト・ガバメントに装填を済ませ車をバックさせ大通りに出ると道を迂回させ第一総合病院へと向かうがそれを遠目に見る者がいたが今の一樹に知るよしもなかった。

13・行動

所々外灯の消えている通りは見通しが悪く傍らでは人であったものが蠢き呻き声を上げている横を一台の車が走り抜けていった。

一樹は数少ない外灯とヘッドライトを頼りに停まっている車等を避けながら目的に向かって走っていた。

そのころ正志の家では・・・

「あいつどこ行っただんだ？外も粗方見て回ったけど見あたらなかったぞ。」

隆は息を切らしみんなのいるリビングに走ってきた。呼吸を整えながら言うがもうそこには一樹はいないのだった。

「離れにも道場にもいませんでした。」

正志も幾分遅れて戻って一樹がいないのを告げると一同沈黙を介している。梨乃が口火を切った。

「もしかして一人で・・・」

皆同じ考えだったがまさかと思ひ誰も言わなかったが梨乃が言った事で隆が声を荒げ言った。

「正志！車あるか！？」

「えっ！？あ・・・裏門の所に停めたままですけど。」

「違ってお前の家のだ！あのバカ多分一人で行きやがった。」

「まさか！？」

正志は愕然とするなか一同が隆に目を配ると隆は荷物をまとめ始めていた。

「ガレージに行けば車あるけど、本当に一樹さん行っちゃったの！？」

莉奈が隆に聞くが隆は黙ったままマガジンに弾を込めていた。

「自分も行きます！」

「私も！」

正志と梨乃が隆に言うが隆は眉間にシワをよせ息も荒く黙っていた。

「隆さん！聞いてるんですか！？」

「うるせえ！！」

正志は隆の肩に手をかけて言うと隆は怒鳴りその手を強引に払いバックを手に持ちその場を飛び出し玄関を出て行ってしまった。

「隆．．．」

梨乃は小さく呟くとどうしていいのか分からず壁に寄りかかり力なく座り込んだ。

「莉奈！梨乃さんを頼んだぞ！」

正志もそう言うつと自分の荷物をバックに適当に詰めるとその場を後にした。

「お兄ちゃん！何処行くの！」

莉奈の叫び虚しく正志には届かず走って行ってしまった。

「みんなバカよ．．．なんで他の人の気持ちもわからないで．．．」

梨乃は座り込んだまま泣き崩れてしまった。そこに莉奈が手を取り梨乃に言った。

「梨乃お姉ちゃん行こう！」

梨乃は手を引かれ何処に連れて行かれるかも分からず莉奈について行った。

その頃裏門には隆が着いていた。コルト・ガバメントを手にし門に手をかけ外すとゆっくりと扉を開け外を覗いた。

車を停めていた場所にはもう車は無くかわりに数体のゾンビが力なく蠢いていた。

「くそ！やっぱ一人で行きやがった！」

隆は車が無いことを確認すると扉を閉め門をかけた。すると後ろに人影が映りコルト・ガバメントを向けるとそこには正志が立っていた。

「やっぱ車なかったんですか？」

隆はコルト・ガバメントを下げると黙ったまま頷いた。

「じゃあ早く急ぎましょう急げば一樹さんに追いつくかも！」

「車は？」

「表門の横のガレージにあります、急ぎましょう。」

正志を先頭に走り出し二人はガレージに向かった。ガレージに着くとそこには梨乃と莉奈がいた。

「莉奈！梨乃さんを頼むって言っただろ！」

莉奈は上を向いて聞こえていないふりをしていてその横には梨乃が黙って立っていた。

「そんな事より車はどこだ！」

隆は梨乃を一目見ると隆に視線を戻し言うと、正志はガレージの扉を開けた。

「あれです！」

そこには軽自動車があり奥にはシートを被った車があった。

「この際わがまま言ってられないからな、鍵は？」

隆は軽自動車に近づくと正志が隆を呼び止めた。

「隆さんどうせならこれなんてどうです？」

正志は奥にあったシートを一気に捲るとそこにはレースにも使われるGT-R32だった。

「この家に合わない車だな。」

「父さんが免許取れたらお祝いで買ってくれたんですよ。軽よりも幾分マシだと思いますよ。でも壊さないでくださいね。」

正志は鍵を出し隆に渡すと助手席に自分のバックを積もうとしたが隆がそれを止めた。

「正志、お前は一緒には連れて行けない。」

「なんでです！？連れて行ってくれるって約束したじゃないですか！」

正志は隆に近づきながら言うがた隆はそれを無視するかのようになり運転席側のドアを開けた。

「何がなんでも一緒に行きますからね！」

正志が言うと隆は急に振り返り正志の頬に右拳を打ち抜いた。

正志は後ろに吹き飛びながら倒れると莉奈が正志に走り寄り隆に叫んだ。

「おじさん何するのよ!」

莉奈が正志の口から垂れる血を持っていたハンカチで拭った。

「正志．．お前には守らなくちゃいけない人がいるって言うてた
だろ?それは嘘か?」

正志はそれを聞いてふらつきながら立ち上がって言った。

「嘘じゃないですよ．．．」

隆は正志に近づくと急に胸倉を掴んだ。

「じゃあお前は俺と一緒に行ってどうやって家族を守るんだよ!」

隆は大声で怒鳴った。するとガレージの表側のシャッターが激しい音を立てて叩かれた。

「くそっ! 大声出しすぎたか．．まあだからそうゆう事だから正志お前は残ってここを守れ。」

隆は胸倉を掴んでいた手を外しながら言うと言とシャッターに近づき隙間から外の様子を伺っていた。

「隆さん．．死んだら絶対許さないっすからね!」

「ああ約束するよ、あのバカ連れて必ず帰ってくるよ。」

その時隆の携帯の着信音が鳴り響いた。

「ん? 信からだ!」

メールを開くと同時にピーツとゆう警告音と共に電源が切れた。

「こんな時に充電切れかよ! かと言って充電してる暇もねえし。」

隆は携帯を握り締め自分のだらしなさに腹が立った。

「隆．．．」

梨乃が閉ざしていた口を開いた。

「どうした?」

「やっぱり私も一緒に連れてって．．うつん私も行く!」

先ほどまで落ち込んで一言も喋らなかつた梨乃が急に言ったので隆は驚いて何て言っているのか分からず呆然としていた。

「やっぱりおじさん一人じゃ一樹さん助けられるか分からないから梨

乃お姉ちゃんが一緒に行った方が安心かもね。」

莉奈が言っていると隆は我に振り返った。

「ダメだ！みんなここにいるんだ、一樹は俺が連れて帰るから待つてるんだ！わかったな！」

隆は車に乗り出ようと思ったがシャッターを開けてしまうと中にゾンビが入ってきてしまうと思い考えて言った。

「正志、シャッターはどうやって開け閉めできるんだ？」

「外と中の両方にシャッターの横にBOXがあつてそれで開け閉めするんです。あとこのカードリモコンでも出来ますけど。」

隆は少し考えて言った。

「お前らは庭に出て俺が合図したらシャッターを開けてくれ、それで俺が出ていいたらまたシャッターを閉めて中に入られるゾンビを最小限にするんだ！正志出来るな？」

隆はそう告げると車に乗りエンジンをかけ何度かアクセルを踏んで調子確かめていた。

すると助手席に梨乃が乗り込んできてシートベルトを締め始めていた。

「ダメだつて言っただろ！今度こそ無事に帰れないかもしれないんだぞ！」

「それは隆だつて一緒でしょ、私だつて何かの役に立ちたい！隆と一樹がいなかったら今私はここにいないんだもの。だから一緒に行かせて。」

隆が正志に振り返り同意を求めようとしたがもう正志と莉奈は扉の所に移動していた。

「おじさん、もうここまで来たら一緒に行かなくちゃ男じゃないんじゃない。」

「隆さん、梨乃無事で帰って来てくださいね。三人の帰り待つてますから。」

隆は呆氣にとられ梨乃を横目で見て考えていた。

「だつてさ、宜しくね隆。」

「本当に危険なんだぞ！梨乃の事守りきれないかもしれないんだぞ！それでもいいのか？」

「うん、分かっている。何かあった時は今度は私が二人を助けられるようにがんばる。」

梨乃は隆を真っ直ぐに見て答えると隆はハンドルを力強く握ると叫んだ。

「正志！こっちは準備OKだいつでもいいぞ！」

正志は扉を開け庭に出ると持っていたカードリモコンのUPボタンを押した。すると機械音と共にシャッターが動き始め下から徐々に外の景色が見えてきた。

そこには先程までシャッターを力いっぱい叩いていた物の姿が見えてくると同時に車はタイヤをスピンさせながら目の前のゾンビを跳ね飛ばしながら颯爽と飛び出して行った。

それを見送った正志はすかさずカードリモコンのDOWNのボタンを押すが中に数体入ってきてしまい持っていたコルト・ガバメントで頭を狙って打つが後ろの狙いはそれて壁に当たり何度か発砲するが肩に当たったりで致命傷にはならずゾンビの進行を止められずいると降りてくるシャッターに一体のゾンビを挟んでしまい途中で止まってしまったため大勢のゾンビの進入を許してしまった。

正志は庭に出て扉を閉め鍵をかけるが何かバリケードをしないと長くは持たなそうだった。

「一樹さん・・・隆さん・・・俺じゃ二人みたいになれないのかなあ・・・」

正志が一人で愕然とし肩を落としていると莉奈が正志の背中を音が響くほど叩いた。

「痛っ！何すんだよ！」

「何すんだじゃないでしょ！おじさん達帰ってくるまでここは乗り切らなくちゃダメなんですよ！私もお父さんもお母さんもお兄ちゃんも頼りなんだからしっかりしてよ。」

気丈に振舞って強がってはいるが足元は小刻みに震えているのが

見え正志は莉奈を抱きしめた。

「ごめんな、俺がすっかりしなくちゃいけないんだよな、莉奈の方が怖いよな。でももう大丈夫だ俺が守るから。」

「うん。」

莉奈は正志の胸に顔を埋め抱きしめ返していた。

「よし、何かここを塞げる物探してこなくちゃな。手伝ってくれるか？」

「もちろん。」

二人は物置等にバリケードが作れるような物を探しに行った。

かなりのスピードで走り抜ける車には隆と梨乃が乗っていて一樹の向かっていった第一総合病院へと後を追った。

14・病院（前書き）

この回は少し短くなっています。

14・病院

午後八時を回りいつもなら人通り少なく静けさの中に佇む建物は今日ばかりは違っていた。

辺りには力なく歩く人であった物は異様な声と共に傷ついた箇所から血を垂らし何かを探し彷徨っていた。

そこから少し離れた所に建物の様子を伺いながら身を隠してる一樹がいた。

一樹は携帯を取り出して見ると一件のメールがあつた。

「直美！」

一樹は我を忘れてメールを開くが直美ではなく信だった。

『みんなどこだ？電話繋がらないからダメかもしれないがメールしておく。届いたらメールくれ。』

一樹は信が無事だった事が分かるとホッとし信に返信した。

『みんな無事だ、安全な所に隠れて隆にもメールしてやってくれ。』
メールを送信するとまた辺りを見回しながらゾンビに見つからないように建物へと近づいていった。

あと数十メートルの所になるとその建物の横に第一総合病院と書かれた看板が見えた。

ガラスで出来た自動ドアの中は明かりはついていて一階のロビー部分見渡せるがそこには数体のゾンビが見えるだけで生存者は見当たらなかった。

一樹は病院の上層を見ると所々部屋の明かりを見るとそのどこかに直美が居ると信じ、突破するタイミングを伺っていると静寂の中携帯のバイブ音が鳴り響き近くにいる一体のゾンビが振り向き一樹は見つかってしまった。

一樹は両手にコルト・ガバメントを装備すると一気に病院の自動ドアに向かって走りだした。

それに気づいた他のゾンビも足取り重く一樹の進路を妨害するかのようになり、両手を前に出し捕まえようとするが持ち前の身の軽さでゾンビの間をすり抜けていきすぐに自動ドアまで辿り着いた。

機械音と共に自動ドアが開くと中にいたゾンビが気づき一樹に近寄ってきた。

ロビーは結構な広さがあり外からでは数体しか確認出来なかったが中に入ると予想以上の数がいって驚きを隠せなかった一樹は一瞬固まるがすぐ我に返り一樹は振り返ると外に飛び出した。

外にいたゾンビももう数メートルまで近づいてきていた。ロビーにいるゾンビも刻一刻と迫ってきていた。

一樹は両手に持っていたコルト・ガバメントを二丁ともズボンに差し込むと横に走り出し病院の壁に上へと続く配管に手をかけよじ登り始めた。

ゾンビの集団は一樹の登る配管まで来ると手を上に突き出し一樹を掴もうとするが既に届く位置には居なかった。

二階の明かりのついていない窓に辿り着くと中を確認するとそこにはシャツ等が置いてあり人影は確認できなかった。そのまま上に登ろうとしたが下に群がるゾンビが配管を掴み激しく揺さぶり始めていて配管を止めているボルトが抜けてきていた。

このままじゃ落ちてしまおうと感じた一樹はその窓に手をかけると運良く鍵はかかっておらずすなりと中に入れた。

同時に丁度一樹が居た位置から配管は折れて落下した。

ズボンに差していたコルト・ガバメントを手に取り部屋の中を探索し安全を確認すると通路に通じるスライド式のドア取っ手を握るととっただけ開き外の様子を伺った。

すると通路を埋め尽くす程のゾンビがいてドアが動いたのに気づいたゾンビがこちらに向くと一樹と目が合い咄嗟にドアを閉めるが激しい音を立ててドアを叩き始めた。

一樹は取っ手を力一杯握り開かないようにしたが長くは持ちそうになかった。近くに畳まれて置いてあったシートが目に入り手を伸ばしなんとか手に取る事が出来ると取っ手に巻き横にある柵に縛りつけなんとかその場を凌いだ。

「なんなんだこの数は!？」

一樹は驚愕し直美の安否も不安になったが自分に残された時間がない事を考えると例え生きていなくても限られた時間直美を探す事だけを考えようと決意した。

ドアを叩く音が少し弱まり一樹は携帯を取り出してみるとメールが二通着ていた。

信『一樹どこにいたんだ? 隆と直美は返事こねえし。こつちも色々あって大変だったんだぜ! 今そつちに向かつてるよ。』

兄貴『一樹無事か?』

一樹はメールを読んでみると突然激しい音が鳴るとドアが外れ隙間から何本もの腕が伸びてきた。

「やつべえ!」

部屋を見渡すが他に逃げ場はなく窓に向かい外を見るが配管は途中で折れていて手は届きそうになかった。

一樹はおもむろにシートを手に取りまたしても窓に向かいシートを捻り先端を小さく縛ると配管を支持するボルトに向かつて投げつけた。

すると配管とボルトの隙間に上手く通り先端をキャッチすると同時にドアは倒れ中に数え切れないほどのゾンビが入ってきた。

一樹は後ろを振り返ると窓に足をかけ外に飛び出すとシートを掴んだまま宙吊りになりなんとか足を壁にかけ配管まで手が届きまた上へと登り始めた。

15・救助（前書き）

かなり長い間休んでいましたが少しずつでも更新していききたいと思
いますのでどうか宜しくお願いいたします。

15・救助

暗闇の中静かに佇む建物の回りに悲痛の叫びともれない呻き声を上げ彷徨う者、建物の壁を幾度も力強く引っかく指は爪は剥がれ落ち肉さえも削がれ骨が露出しても止めない者の頭上では配管に引っかかり垂れ下がったシーツの少し上に一人の男が配管をつたって上へと上っていた。

三階を通り過ぎ四階に必死の思い出辿り着いた一樹はすぐ左側の窓が開いているのに気づき窓に手を伸ばした瞬間骨が軋むぐらいの強さでその腕を掴まれた！

開いた窓から変貌を遂げた人間が身を乗り出して一樹に襲い掛かってきた！

だが一樹は掴まれている腕で掴み返しそのまま窓の外へと引っ張り出すとゾンビは重力に逆らえず一樹の左腕に爪を食い込ませ傷を残して落下して下に群がるゾンビの上にグチャッ！とゆう音と共に数体のゾンビを道連れに活動を停止した。

開いた窓の中を身を乗り出し警戒しながら見るがロッカー等が邪魔をして中が見渡せないが腕に少しずつ力が入らなくなってきたのもあつて意を決して中に入り込む事に決め、音を立てずに照明のついていない部屋に入り込んだ一樹はズボンに差していたコルト・ガバメント二丁を取り出し前方に構えながら月明かりを頼りに部屋の安全を確認したがそこにはゾンビの姿はなかった。

この部屋はさっきの部屋とは違い少し狭く扉もアルミ製で手前に引いて開けるいたって普通のドアだった。

「ここは更衣室か・・・？」

一樹はボソリと呟くとコルト・ガバメントを一丁ホルダーに収めドアに鍵がかかっているのを確認した。

ロッカーに寄りかかりタバコを取り出し火をつけ深く吸い込むと少しばかり肩で息をするとズボンから携帯を取り出し直美にメール

を送った。

『無事なら返事くれ、俺は今病院の四階にいる。』

するとどこからか異音が聞こえ耳を済ませると寄りかかっているロッカーから聞こえた。

ロッカーを見つめネームプレートを見るとそこには田木と書かれていた。

ロッカーに手をかけると鍵はかかってなくカチャツと小さな音をたてて開いた。中にはナース服がかかっている下には見慣れたバツクが置いてありそこから異音が聞こえてきていた。

その場にしゃがみ込みバツクを手に取り開くと中に異音の正体があった。直美の携帯だった。メールを開くと一樹からのメールが着ていたが読まずに閉じて携帯が壊れそうならい力強く握り締めた。小刻みに震え憤りのない気持ちを抱いていると目下にあるバツグの中の手帳からはみ出していた写真に気づきそれを取り出すと学生服の一樹と直美だけが写っている写真だった。

そのまま立ち上がると写真をズボンの後ろポケットに入れ窓に向かって歩きだし窓に辿り着くと息を深く吸うと大声で叫んだ！

「直美！助けにきたぞ！いるなら返事しろお！！」

一樹は叫び終わると窓から体を乗り出し他の窓をキョロキョロと見回していると同じ階の一室の窓から何かが外を覗き込んで一樹に気づくとすぐさま顔を引っ込めてしまった。

一樹は急いでドアに近づくとドアの外に何かがいるのがはつきりと分かっていたが今の一樹の思考回路に回り道とゆうのはなかった。ホルダーからもう一丁コルト・ガバメントを取り出すと一呼吸置いて鍵を開けドアノブを回し勢いよくドアを開くとそこには先程一樹が叫んだのもあってナースや医者ゾンビが群がっていたが一樹の目の前にいるゾンビは一樹を黙認するやいなや後ろに脳漿をぶちまけその場に崩れ落ちたが次々と迫ってきた。

一樹は怯む事なく的確に頭部を打ち抜いていくが二丁共全弾打ちつくしてしまうが目の前のゾンビに体当たりを放ちながら通路へと

出ると同時に一丁を口に咥えてポケットからマガジンを一つ出し素早くマガジンを入れ替えると銃身をスライドさせるとすぐ目の前に顎が外れるぐらいに口を開いたゾンビが襲ってきていたが下からコルト・ガバメントの銃口を向け発砲すると顎から脳天に銃弾が突き抜けていった。

一樹は先程人影を見た部屋の方にゾンビを跳ね除けながら走ると二階の病棟に比べこの階は更衣室等病院関係者以外立ち入らない階とゆうのが幸いしてゾンビの数も多くはなかった。

走りながら口に咥えたコルト・ガバメントにも装填を済ませると振り向きながらゾンビめがけて発砲するが走りながらとゆうのもあり当たらなかつたが、やっと人影を見た部屋のドアの前まで来て一樹はドアを叩いた。

「おい！開けてくれ！中にいるんだろ！」

一樹の叫び空しく返事はなかった。

「コラ！返事くらいしやがれ！」

徐々に追い詰められる一樹はゾンビに向かって発砲するが数が多くないと言っても少ない訳ではない。

「くそが！」

ドアを力一杯殴りつけると一つ奥にあるドアが目に入りそこに駆け寄りドアに手をかけると鍵はかかっていなく開くとすぐさま脇目もふらず窓に向かっていきコルト・ガバメントをズボンに差し窓を開けると右側の物陰から一体の白衣を着たゾンビが飛び掛ってきたが一樹は一步横に避けると同時に後頭部に回し蹴りを放つと勢いで壁に顔面を打ちつけズルツと血の跡を壁に残して動かなくなった。

それを確認するとまた窓に向かい体を外に乗り出し隣の窓ガラスをコルト・ガバメントの尻で叩き割りそのまま隣の窓に飛びついた。外にぶら下がった一樹は割れたガラスで手や指が痛々しく切れて血が腕を伝い垂れてくるが渾身の力を振り絞って体を引き上げ何とか部屋に入ることができた。

その瞬間一樹の頭部に想像もつかない衝撃が走り一樹は気を失っ

てしまった。

現在 20 : 40

16・生存者（前書き）

少しずつでもUPしていこうと思うので短いかもしれませんが御了承ください。

16・生存者

「真っ暗だ．．．どこだここは．．．俺は何を．．．」

「．．き．．．か．き．．．一樹．．．目を覚まして．．．一樹。」

「直美．．．?」

一樹はその声に気づくと少し重くなった目蓋を開き呟くがそこには直美は居なく代わりに一人の男が横たわり後ろ手に縛られた一樹に銃を向けて立っていた。

「おい！言葉がわかるなら動くな！」

男は銃を何度か握り直しなんとか聞き取れる小さな声で被一樹に問いかけた。

「ぐっ．．け．．警察？」

一樹は頭に酷い傷みが走るが堪えて体を起き上がらせると目の前にいる男は30代前半ぐらいの警察官だった。

「よし、すまないが念のため縛らせてもらった。聞きたい事があるんだが何をしにここへ来た？」

「知り合いを助けに来たんだ、だからこれ解いてくれないか？」

一樹は壁を背に寄りかかりながら立ち上がり回りを見るとドアはバリケードで塞がれていてその横には何人かが身を隠していた。

「本当か？わざわざ奴等がうじゃうじゃいる所に来たってのか？」

「そうだ。」

「じゃあこれは何だ？」

警察官はバックからコルト・ガバメントとニューナンプを取り出して見せた。

「この非常事態だ少し拝借させてもらったただけだ、映画でもそうしてるだろ？」

警察官はバックにコルト・ガバメントとニューナンプを戻すと銃を構え直すと一樹に近寄ってきた。

「信用できないな、申し訳ないが助けが来るまでそのままでもいい。」

「ちよつと待つてくれ俺には時間がないんだあんた達には迷惑かけないしすぐここを出て行くから頼むよ。」

一樹はそう言いながら少し警察官に歩み寄った。

「動くな！この状況だ次は発砲するぞ！」

「わかった！わかったから撃たないでくれよ。．．．あつ？」

警察官に許しを請うと何かに気づいたのか少し声を出して上を見るとつられて警察官も頭上を見た。

その一瞬．．一樹は前に出されて銃を構えていた手を右足で蹴り上げると銃は真上に弾き飛ばされ天井に激突すると衝撃で発砲され乾いた音の後ガシャーんとゆう音と共に窓ガラスが粉々に割れた。銃は天井に当たり床へと落ちる前に一樹は蹴り上げた足を戻しそこにジャンプし足を縮めると後ろ手に縛られた手を潜らせて前に出し着地すると同時に両手を警察官の首筋に強打した。

警察官は蹴られたのと銃の発砲で驚き何も出来ない所に打撃を受けてしまったので倒れ目を虚ろにしていた、一樹は落ちてきた銃をキャッチしようと思ったが手が届かず床に銃は落ちてしまった。

すぐさま倒れている警察官の首を踏みつけ言った。

「動くな！動くとこのまま首の骨へシ折るぞ！．．映画とかじゃキャッチできるのになあ．．」

聞いてるかどうかは月明かりだけでは表情が確認できなかったが縛られていた布切れを口で咥えて解き足を警察官の首に置いたまま落ちた銃を拾い上げると横腹に強烈な衝撃を受け吹き飛ばされてしまい壁に激しく背中を打ち付け銃を落としてしまうと痛がる暇もなく首を締め上げられ壁を背にそのまま高々と持ち上げられた。

「ぐうえ．．くつそ！」

一樹を持ち上げているのは奥に潜んでいた一人だった。

容姿は髪を上で縛り体格はかなり太っていて浴衣を着ていた、そう相撲取りだった。相撲取りは一樹を持ち上げたまま更に力を入れ

締め上げていくと一樹は意識が朦朧としてきた。

何とかしようと腹や胸に膝蹴りを入れ顔を殴りつけるが宙に浮き力が入らないこともありビクともしなかった。

薄れる意識の中開いた口からはヨダレを垂らし口端からは少し泡が出て小刻みに震えていたが徐々に体は脱力しやがて意識は飛んでしまった。

17・責任（前書き）

ありきたりな展開にはしたくないとゆう考えで執筆していますのでどこか変な所がありましたら気軽に申し付けください。

17・責任

意識を失った一樹に更に追い討ちをかけるかのように締める力を弱めなかった相撲取りだった。

すると異変が起きた、一樹の体が一瞬大きく跳ねた。

「なっ何だ？」

何か違和感を感じたがそのまま首を折ろうと更に力を入れる相撲取りだったが一樹の眼が大きく見開かれると一樹の右腕は締め上げる相撲取りの左腕を掴んだ。

段々と一樹の指がめり込んでいく、相撲取りの腕は指が食い込みその部分から血が垂れてきた。

「ぐつくくく！」

相撲取りは傷みを我慢し首を折ろうと力を込め捻りあげた！

「ベキヤツ！」

部屋に鈍く何かが折れる音が響くと一樹は締められた腕を放され地面にへたり込んだ。

「ギヤアー！！」

鈍い音の後数瞬送れて部屋の中に叫び声が響くと相撲取りは座り込んで左腕を押さえていた。

一樹は首を押さえ細かく大きく何度も呼吸をすると息を整える前に落ちていた銃を拾い目の前に座り込む相撲取りから距離を取り相撲取りと警察官と奥に潜む者に銃を向け威嚇していた。

呼吸が整ってくる警察官の近くに落ちているバックに銃を構えたまま近寄り手にした。

その時ドアの外からドアを叩く音や引つかく音が聞こえた。

「ちっ！気づかれたか！おい、あんた達に危害を加えるつもりはない、だからすまないが出てきてくれないか？バリケードも確認しなくちゃいけないしこのお相撲さんも手当てしないと。」

すると暗がりからゆっくりと三人姿を現した。一人はナース服を

着ているので看護師だろう、それに肩を抱かれ出てきたのは十歳ぐらいのパジャマを着た女の子、もう一人は眼鏡をかけた痩せた男だった。

「すまないこんな事するつもりじゃなかったんだ、人を探してるだけなんだ、だからすぐにここを出て行くから心配しないでくれ。分かってくれたなら手当てしてやってくれないか？」

そう言う看護士は小さく頷くと女の子と一緒に相撲取りに駆け寄っていった。

「この人は大丈夫だなそのうち目を覚ますだろう、バリケードも問題ない。」

眼鏡をかけた男は警察官を見て言った。

「わかった、ありがとう。」

一樹は壁に寄りかかるとバツクの中身を見ると全て一樹の物だったコルト・ガバメントに装填を済ましたがコルト・ガバメントの予備弾はマガジン一個分の7発だった。

バツクから荷物を取り出し装備していくと看護士が一樹に言った。

「あの．．良いですか？」

「何？」

看護士は唾を飲み込み一呼吸置いて言った。

「腕の怪我なんですけどかなり酷いです、骨が折れたとゆうより粉々になってるんです。添え木なんかじゃなく早急に手術しなくちゃいけないかもしれないです。」

一樹は自分でやったものの驚きを隠せなく相撲取りの所まで行くと警察官を介抱していた眼鏡の男も近寄ってきた。

「これはまずいな、手術しないとこの人一生使い物にならなくなるぞ。」

眼鏡の男は怪我を見て言った。

「あんたは？」

「この医者だよ、それよりもどこをどうすればこうなるんだ？」

医者は眼鏡に指をかけ少し上げて一樹を横目で見て言った。

「．．．意識がハッキリしてなくてなんか目の前が真っ暗になってもうダメだと思つてて気づいたらお相撲さんが座り込んでたんだ．．．すまない．．．」

一樹は俯き肩を落としていると相撲取りが言つた。

「．．．大丈夫だ、こ．．．このぐらいなんて事はないつすよ。」

「何を言つてる！これじゃ少し動かすだけでも痛むだろ。」

「なあに稽古に比べればこのぐらい、しかも素人さんに怪我させられたなんて親方にしたらそれこそ大ゴトつすよ。」

相撲取りは額にすごい量の脂汗を滲ませ左腕を右腕で押さえながら言つた。

「わかつたよ。添え木をすれば少しはマシだろう。」

医者はパイプ椅子を持ち出し逆さにして椅子の足を何度も曲げると根元から折れた、それを四本共やると相撲取りの腕に添えるなどこからか出したのか包帯を巻き最後に包帯を肘と手首に縛つて輪を作り首にかけた。

「どうだ？」

「ああ大丈夫だ、心配ないつす。」

少しは楽になったもののその傷みは想像がつかないぐらいなのだろう表情は曇つたままだつた。

「．．．．．すまない、こんな事するつもりじゃなかったんだ．．．」

「気にするな、俺だつてあんたを殺すつもりだったんだからこのぐらいで謝らなくていいつす。」

「本当にすまない、本当何て言つていいのか．．．そうだこれを。」

一樹はバックからニューナンプを二丁出すと医者に渡した。

「これは？」

「一つはそのマツポのもう一つはないよりマシつて事で良かったら使つてくれ、全部渡してもいいんだけど行かなくちゃいけないから必要なんだ．．．本当に迷惑かけたすまない、そのマツポにも気づいたら謝つておいてくれ。」

一樹は窓に向かい携帯を見ると時間は21:30を過ぎていた。

「君はどこに？」

「人を探してるんだ、この病院のどこかにいる筈なんだよ。」

「その人は一体誰なんだ？こんな危険を冒してまで助けようとするなんて大事な人なのか？」

一樹は少し黙り窓の外を眺めながら言った。

「この病院の看護師で田木ってゆうんだけど昔からの・・・友人なんだ。」

「田木？あの田木か？」

「田木先輩の事ですか？」

二人共ほぼ同時に言うとい樹は振り返り看護師に近づくと 肩を掴み揺さぶった。

「知ってるのか？どこだ？どこに？直美はどこにいるんだ！」

我を忘れた一樹は看護師力強く掴み揺さぶっていると医者に制止された。

「ちよつと君それじゃ知ってても話せないだろう。」

一樹はハツとしすぐに手を離れた。

「すまない、わかる事があつたら教えてくれ、頼む！」

「田木先輩は外にいる人達が溢れ出す前に自衛隊？の人達が来て避難したと思います。私もその人達に連れていってもらったんですけど人波に飲まれて出遅れちゃって、そうしたらこの子に会ってどうしていいのかわからなくて隅でじつとしてたらおまわりさんに会ったの。それで外より中に立て籠もる方が安全だとゆう事でここにいます。あつ田木先輩は車に乗り込む所見たから大丈夫だと思えますよ。」

「私も似たような物だな。」

一樹は直美が絶対ではないにしろ無事だというのを聞かされ安心してその場に座り込んだ。

「それでその自衛隊？はどこへ？」

「ごめんなさい、そこまでは分からないの。」

「そつか．．．それだけでもわかっただけでも良かった、ありがとう。」

一樹は再び窓に向かおうとすると医者が少し考えて言った。

「もしかすると．．。」

「何か知ってる事でも!？」

一樹はまたまた皆がいる所に戻った。

「いや、絶対ではないから聞くだけ無駄かも．．．」

「それでもいい!教えてくれ!」

「本当に多分なんだがうちの院長はその手の人達に知り合いが多いから何か手がかりがあるかもしれないと思ったんだが、この状況じや院長室まで辿りつけないから無理．．．か。」

「その院長室はどこなんだ?頼む教えてくれ。」

「多分．．．」

医者は歩き出し窓の外を覗くと一樹を呼んだ。

「君ちよつと、三階のこの真下の部屋がそうだよ。」

一樹は下を見ると二階に別棟に繋がる渡り廊下があるのが見えた。

「真下か、わかりました行ってみます。」

一樹はバックを手に取ろうとして屈むと後頭部に何かが押し当てられた。

「動くな!」

それは警察官が一樹に銃口を突きつけていた。

「よし両手を上げてゆつくりこっちに向け。」

一樹は言われるままに両手を上げゆつくりと後ろを向いた。すると警察官に顔面を殴りつけられ顔は横に向いたが何事もなく前を向き直した。

「話しは聞かせてもらったぞ、俺も一緒に連れて行け!ここはいつ奴等が入ってくるかと思うと安心してられないからな。」

警察官は顔色が悪く何か鬼気迫るものがあつたので一樹は逆らわないで従おうと決めた。

「わかった、だけど避難場所がわかるかどうかは確かじゃないんだ

ぜ。それでもいいのか？」

「それでもココよりはマシだ！」

「この人達どうするんだ？お相撲さんは俺のせいで怪我させちまつたし女の子だっているんだぞ。」

「俺に指図するな！そんなの知るか！この状況でもお誰かの事なんて構ってられるか！どうにかしたいなら自分がどうにかしろ。」

一樹はこの状況をどうするかなんて思うより何か手がかりを見つけて隆にメールするとゆう考えに切り替わっていた。

自分に残された時間で精一杯出来るのはそれと、この人達を守るぐらいだと考えていた。正義心とかじゃなく自分がここにこなければ警察官もこうならなかったかもしれないし相撲取りも怪我をしなかった。

「わかったじゃあ俺が行って来るから待っててくれ。」

「ダメだ！俺も一緒に行くぞ！逃げられたらたまったもんじゃないからな。」

一樹は窓に振り向こうとしたら警察官に抑止された。

「ちよつと待て持つてる拳銃をこっちに渡してもらおうか。」

警察官は右手で銃を一樹に突きつけ左手を前に出すと一樹はズボンとホルダーからコルト・ガバメントを出し渡した。

「これで良いか？良いならどうする？俺が先に行くか？」

「指図するな！どうやって行くつもりなんだ！？考えでもあるのか！？」

一樹の頭部に銃を押し当てて怒鳴るとそれを避けるように後ろを振り向きカーテンに手をかけ下に力一杯引くとカーテンレールからフックが外れ手に取るともう一枚のカーテンも同じ事をし二枚を縛り合わせると窓と窓の間の冊子に縛ると外れないか何度も引っぱり確認した。

「どうする？あんたが先か？俺が先か？」

縛ったカーテンを警察官に向けて差し出して言つと銃口で窓の外を指され行けと指示された。

「無茶だ！彼は銃を持っていないんだぞ、みすみす死に行くようなもんだぞ！」

医者が警察官に近寄りながら言つと警察官が医者に振り返った。

「動くな！じゃあお前が変わりに行くか？」

「俺なら大丈夫だ。」

一樹は医者を見て小さく頷くとシーツを握り開いた窓から外に投げ出すとそのまま飛び降りた。

「何！？」

警察官は慌てて窓に駆け寄り下を見ると渡り廊下の上は何事もなかったかのように立っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5972c/>

DEAD

2010年11月11日00時54分発行